



ひなゆめファンタジーの止まり木

小説合同本

No.9

目次

(著者名は敬称略)

ひとつ飛ばして

著者…充電池

3

こけしいろたてロール

著者…ロッキー・ラックーン

18

それが一番！

著者…サタン

25

初芝ヒスイ登場「新世界の神話外伝」

著者…R I D E

38

春の訪れは苦難の後に

著者…瑞穂

47

著者あとがき & メッセージ

66

編集後記

71

奥付

71

表紙イラスト…ピーすけ

本文挿絵…双剣士

本書は、「ひなゆめファンの止まり木」における第9回クイズ大会（2016年5月7日）にて上位を取った方々による、合同小説本です。

公開サイト…ひなゆめファンの止まり木

<http://soukensi.net/perch/>

クイズ企画の趣旨説明と結果ページ

<http://soukensi.net/perch/sp/quiz09/>

ひとつつ飛ばして

著者…充電池

白皇学院には、ひな祭り祭りという楽しいお祭りがあ
るらしいです。

私は春にこの学校に入学して、初めてそのお祭りを体
験するわけで、非常に楽しみにしています。

お祭りとか好きなので、前に朝風神社でやっていた何
かのクイズ大会も、興味本位で参加しました。

それを生徒会長に言うのと、それなら何かステージでも
やってみたら？ そんな提案をされました。

「ということ、二人で漫才をすることになりました。

頑張りましょう、シャルナちゃん！」

「……………」

「アイタタタ！ どうしてほっぺを引っ張るんですか
ッ！」

「…夢じゃないかと思って。でも安心したわ、痛くな
いからコレは夢」

「いやいや、文自身はとっても痛いですから！」

「分かってる。文ちゃんは十分に痛い子だと思う」

「……………」なるほど！」

よく分からないけれど、とにかくシャルナちゃんも喜
んでくれているみたいです。

「いや、なるほどじゃないから。私はそんな訳のわか
らないことはしないから」

「えー、でも既にエントリーは済ませてありますし——
—アイタタタッ！」

「私は漫才なんてしたことないし、自信もない」

「大丈夫です！ シャルナちゃんの考える漫才ならきつ
と大爆笑間違いなしです！ 天下取れますって！——
—アイタタタア！」

「……………」

「嘘です！ 嘘です！ 脚本は文が自分で考えます
ッ！」

そう言うとうまくシャルナちゃんは手を放してくれ
ました。

それにしてもシャルナちゃんにこれほどまでの力があ
ったとは驚きです。

いや、もしかするとシャルナちゃんの故郷ではこれく
らいが普通なのかも——。

もしそうなら、シャルナちゃんには筋肉ネタとかが似合う……!? これだ!!



翌日、シャルナちゃんを発見しました。

「見て下さいシャルナちゃん！ 昨日、徹夜でネタを考えました！」

「どれどれ………ふむふむ」

「どうですか？ 面白いですか？ 控えめに言って爆笑モノだと思うのですが」

「これは……とても笑えるわね、文ちゃん」

「本当ですか!! それでさっそく練習なんですがつてシャルナちゃん一体どこへ？」

「ちよつと生徒会室まで、エントリの取り消しに」

「ええええ!? ちょ、待って下さいシャルナちゃん!!」

ネタがハイレベルすぎて逆に自信をなくす気持ちは分かりますが、ここで辞退なんてあんまりですよ！」

私が一晩じっくりコトコト煮込んだネタが秀逸すぎるのは分かります。

このじゃじゃ馬ネタを上手く使いこなすのは難しいでしょう。

ですが、きつと大丈夫。私達がコンビを組めば、たとえ相手がゴリラだろうと負けはしません。

「……………それじゃあ言わせてもらおうけど——」

「ハイ……」

「このコンビ名は何？」

「え？ ああ、これはですね、『ビューティフル・マッスル』と読みます」

「いや、読み方じゃなくてね。……まあとにかく、このコンビ名は絶対に却下だから」

「ええ!? 文とシャルナちゃんにはピッタリな名前じゃないですか！」

「一応訊いておくけど、どのへんが？」

シャルナちゃんの握るこぶしが固そう。

「ビューティフルな文！ マッスルなシャルナちゃん！」

「…………」

パイと私に背中を向けて歩いて行くシャルナちゃん。てつきりその拳で5〜6発殴られると思っていただけ、これは意外です。

「まさか！ 生徒会室に：!？」

「うん。ちよつと金属バットを取りに」

「ひい！ 勘弁してくださいッ！」

「コンビ名を変えるなら拳で勘弁してあげるわ」

「拳は確定ですかア!？」

そんなシャルナちゃんから私へ、愛のあるゲンコツが一発。とても痛いです。

コンビ名はまあおいおい考えるということになり、肝心のネタを見てもらうことになりました。

「で、ネタはどうですか！ 面白くないですか!？」

「いや、その前にココなだけ——」

シャルナちゃんが脚本の一部を指さします。さてさて、シャルナちゃんのお気に入りのお気入りのネタは何でしょう？ と思つたら、それは何でもない序盤の挨拶の部分。まさかシャルナちゃん、お笑いが分かっていない：!？」

「ここがどうかしました？」

「文ちゃん、読んでみて」

「………………。はい、読みましたけど！」

「いや、黙読じゃなくて、声に出して読んで」

「どーもー、日比野文です。シャルナ・アラブルゲルです。二人合わせて——」

「はい、そこ」

「なにか？」

「アラブルゲルって誰？ キ〇グスライム？ 移動式住居？」

なんだかシャルナちゃんが意味不明な怒り方をします！ 大変です！

でもどうしよう、私、いつもシャルナちゃんって呼んでるから実はフルネーム知らないし！

とりあえず家に帰ったらアラブルゲルでググって、存在してたらシャルナちゃんに教えてあげましょう！

「じよ、冗談に決まってるじゃないですかシャルナちゃん。これは一応ネタですからー」

「分かったわ。でもそのネタはやめてね」

「ふあい！」

これはいけません。これ以上シャルナちゃんを怒らせるわけにはいけません。

とりあえず家に帰ったらシャルナちゃんのフルネームをググって、存在したらシャルナちゃんに教えてあげましょう！

「じゃあ気を取り直してもう一度」

「ドーもー、文です。 シャズナです。 二人合わせて

「ごめんなさい文ちゃん。私、ロックには詳しくないから」

「もーシャルナちゃん、だから冗談ですってー！ そう
いうネタですからー！」

「ネタをやるのはステージだけにしておね」

「ふあい！」

とにかく今ははぐらかしましょう！

私の素晴らしいネタを目にすればきっと名前の件なんて忘れてくれるでしょうし！

「じゃあ気を取り直してもう一度」

「ドーもー、文です。 シャルナです。 二人合わせて
ビューティーフル☆マツスルです!!」

「ちよつと金属バットを取りに……」

「違うんです！ よく見て下さい！ ちゃんと“☆”と
かけて可愛くしたじゃないですかッ！」

「……。 文ちゃん、分かっていないようだから単刀直
入に言うけど——」

「ハイ」

「ズバリ、文ちゃんには漫才のセンスのかけらもない。
全然面白くない。」

ネーミングセンスもどこかの完璧超人ばりに無い。
それから文ちゃんのお兄さんも社会的にナイ」

シャルナちゃんの、その言葉は衝撃でした。

私が2時限目の現代文を犠牲にして生み出した渾身の
ネタが、こうもあっさり否定されてしまうなんて。

ですが、さすがシャルナちゃん。 容赦ないですね。

言葉の節々に社会風刺が差し込まれているような気が
しなくもなくもなくもなくなくもないです。

「ではシャルナちゃん……私は一体どうすれば……」

「まずは人を勝手に巻き込んだことを反省するべきだわ」

「反省しました。これからは前もってググっておくようにします」

「……………うーん」

「どうしましたシャルナちゃん」

「探しもの」

「メガネでも落としたんですか？」

「文ちゃんの頭のネジがどこかに落ちてないかと思って…」

「……………っ!!」

私はこの時、確信しました。これはきつと、シャルナちゃんが私を試している……。

センスがないと嘘をついて私を落ち込ませ、そしてソコからの——ボケ!!

どんなに落ち込んでいても、真のお笑い覇者ならボケを見た瞬間にツツコミを入れなければならないのです!

そして今、シャルナちゃんはボケをかましたのです。ここで私は、ツツコミを! 究極のツツコミを!!

「そんなアホなー!」

ポカン。シャルナちゃんの頭を軽く叩いてツツコミを入れてみました。

ボカン。その直後、シャルナちゃんのゲンコツが私の頭に落ちてきました。

「……………」

「シャルナちゃんどうして殴——はっ!」

私はこの時、確信しました。これはきつと、シャルナちゃんが私を試している……。

さつきは私が上手くツツコミを入れたから、次はそっちからボケてみるという無言の圧力鍋。

どんなに沈んでいても、真のお笑い戦士なら沈黙を察した瞬間にボケてみせなければなりません!

そして今、シャルナちゃんはだんまりを決め込んでいる。ここで私は、ボケを! 最高級なボケを!!

「一発ギャグ、一本釣りされたカツオ!」

「私も一発ギャグ、カツオのたたき」

「あっ、やめっ」



とにかく笑いを生み出すためには、笑いを学ばなければならぬ——そう言われて、

その夜はシャルナちゃんも誘って、一緒にお笑いのビデオをたくさん見ました。たしかに私の考えは甘かったかもしれせん。

——ベッピンさん、ベッピンさん、ひとつ飛ばしてベッピンさん

なるほど、これは面白いです。私の目指している漫才に通ずるところがありますね。

最近はこのネタをオマーージュしたネタを披露する芸人さんも多いようなので、私達もそれに乗っかることにしました。

「整いました！」

「文ちゃん、それ違う」

「舞台はスーパーパーの生鮮食品売り場です」

「……………」

「見て下さいシャルナちゃん。あちらから中国産、中国産、ひとつ飛ばして中国産」

「それ、ギリギリすぎてどうつつこめばいいのか分からないんだけど」

「メイドインチャイナカー!! っつつつこめば良いんですよっ」

「それはもはやツツコミですらないから」

なるほど、ボケ倒すだけでも意味がないようです。ツツコミやすさを考えたネタでないといけませんね。

「あ! こんなのはどうです? お客様を前にして、あちらから日本人、日本人、ひとつ飛ばして日本人」

「誰を飛ばしたの?」

「もちろんシャル——ぐぶはっ!」

ゲンコツが来ると思って構えていたのに、腹パンでした!

床で転げまわっていると、ふとシャルナちゃんがネタを口ずさみました。

「それはとある国際道路での出来事…」

「……はい」

「あちらからドイツ製、ドイツ製、人を跳ね飛ばしてドイツ製」

「人を跳ね飛ばしたのは“どいつ”ですかアー!？」

「………」

「………これで行きましょうっ！」

さすがシャルナちゃん。笑いに関しては最高峰ですね。



お風呂が湧いたので、私達は一緒に入ることになりました。

体を洗っているシャルナちゃんをぼんやりと見つめながら、キレイだなと思いました。

「何を見ているの？」

「あいや！ シャルナちゃんは普段はメガネをしていて髪も結んでいるので、そういう姿が新鮮で！」

「ふーん」

「あそくだ！ せっかく女の子同士で漫才をやるんです

から、セクシー漫才なんかも取り入れてみましょう！」

「セクシー漫才？」

「あちらからEカップ、Eカップ、ひとつ飛ばしてEカップ」

「それじゃあただのエロ漫才だから」

「あちらからSカップ、Sカップ、ひとつ飛ばしてえエスカアアアップ！」

「……肉体疲労に効きそう。というより、『ひとつ飛ばして』っていう漫才はもういいから」

「そうですか」

私達女性にしかできない漫才、それはきつとセクシー漫才なのだと思います。

ですが、そうは言ってみたもののセクシー漫才とは具体的にどんなことをすればいいのでしょうか…。

それにセクシー漫才と言っても学校のお祭りのステージでやるわけだし、きつと過激すぎてもいけません。

なんかこう、お祭りの雰囲気ならではのセクシーを…。

お祭り……。 お祭り…。

「そういえばシャルナちゃんはお祭りで浴衣とか着ますか？」

「ええ。日本のお祭りは好きだし、浴衣は着るわ」

「おお。ちよっとシャルナちゃんの浴衣姿はそそりますねえ。」

あ、ちなみに浴衣の下には下着をつけないという都市伝説がありますが、実際のところはどうです!？」

「下着は履く」

「……ちなみに何色のゴボゴボゴボ——」

湯船に頭を押し込められると、人間は呼吸ができなくなります。

「文ちゃん、何か言った?」

「——ぷはあつ! えっと……ですね、ハア、ハア……ぐへへシャズナちゃん何色の、ハアハア下着ゴボゴボゴボ——」

シャルナちゃんの Melty love が深すぎて息ができません。

「文ちゃん、何か言った?」

「——ぷはあつ! えっと……ハア、ハア……何でもありません」

これは新たな都市伝説です。シャルナちゃんに下着の色を訊くと、息ができなくなります。

「ちなみに文ちゃんはどのなの?」

「白ですけど?」

「いやそうじゃなくて、浴衣の下に下着をつけるかどうか……まあ、もう分かったからいいんだけど」

「どうか私、お祭りでも浴衣は着ない派ですの」

「文ちゃん、それは刑法174条公然わいせつ……」

「服は着てますつてツ!!」

「……」

「……これで行きましょうっ!!」

さすがシャルナちゃん、セクシーに関しては完全無欠ですね。



お風呂も済んだところで、今度は一緒に晩ご飯を食べることにしました。

今日は家に私(と兄)しかいないので、シャルナちゃ

んが泊まっていつてくれることが嬉しくてたまりません。
ご飯はちょうど昨日の残りのハンバーグとサラダがあつたので、それをチンして食べることにしました。

シャルナちゃんはサラダを見て眩みます。

「文ちゃん。こちらからブロッコリー、ブロッコリー、人を跳ね飛ばしてブッコロリー」

「なぜ急に恐ろしいことを言い出すんですかシャルナちゃん」

「なんとなく」

パクリとブロッコリーをブッコロリーするシャルナちゃん。

急にそんなことを言われてしまうと、なんだか私も創作意欲が湧いてきます。

「シャルナちゃん！こちらからブロッコリー、ブロッコリー、ひとつ飛ばしてブロッコリー」

「何を飛ばしたの？」

「純白のカリフラワーですッ！」

「……………」

「どうですか、私のセクシーネタは！」

「ごめん、全然分からなかった。どの辺がセクシーだったの？」

「純白のあたりが、です」

「……………」

こうかはいまひとつのようだ。

「じゃあコレはどうです？ 花嫁さん、花嫁さん、ブーケを飛ばして花嫁さん」

「それはセクシーネタじゃなくて、ゼクシイネタですよ？」

「いいツツコミじゃないですかシャルナちゃん！」

「いや、こんな分かりづらいネタはダメ。というかこのネタはもういいって」

「最初に言い出したのはシャルナちゃんじゃないですかッ！」

それからハンバーグを食べつつ、漫才のネタを考えることにしました。

しかし、なかなか思いつきません。思いつくのは何かを飛ばすネタばかり。

漫才を考えるとというのは大変ですね。レシピを見て

作るだけの料理なんかより遥かに難しいです。

「ところでこのハンバーグは文ちゃんか？」

「いいえ、それはおかーさんが昨日作り置きしておいてくれたものです」

「へえ、どうりで」

「それはどういう意味ですかッ!? ……そういうシャルナちゃんも料理とかするんですか？」

「私？ 私は兄弟も多いからそれなりに」

「それなりに!? どれくらいソレナリなんですかッ!!」

「インドで有名な『香辛料のさしすせそ』を使いこなすくらいソレナリ」

「へえ、ドイツと日本では違うんですね」

「いやインドだから」

「それで、どんな『さしすせそ』なんですか？」

「サンショウ」

「はい」

「シソ」

「はい」

「スターアニス」

「はい」

「セージ」

「はい」

「ソレナリ」

「はい!？」

「……………」

「……………これで行きましようっ!!!」

あとで調べてみたら、シャルナちゃんがまったくのデタラメを言っていることが分かりました。

◇ ◇ ◇

食事も済んだところで、私はパソコンの前に座ります。ネット上に何かヒントになるようなことがあればいいなという淡い願望です。

ところがシャルナちゃんはテレビに夢中です。呼んでも振り向いてくれません。

「シャルナちゃん!」

「……………」

「あちらからシャルナちゃん、シャルナちゃん、ひとつ飛ばしてシャルナちゃん!」

「……………」

「シャルナちゃん、そこは『どうして飛ばすの!?』って
つつこむところですよ!」

「私が複数人いることの方が気になるんだけど」

「はっ! そこに気付くとはさすがシャルナちゃん、やるな!」

シャルナちゃんはようやくこっちに気付いてくれました。
た。

まったくシャルナちゃんは私の相方なのだから、ずっとそばにいてくれないと困ってしまうのです。

「で、何を調べているの?」

「シャルナちゃんです」

「……………」

「……あっ!」

「どうかした?」

「SYARUNAちゃん、SYARUNAちゃん、Sを飛ばすと
ヤルナちゃん。…やるな!。 ヤルナちゃんしやるな!」

「……………」

あれ? シャルナちゃんのことだから、てっきり怒る
と想像していたのに、これは予想外です。

もしかして私がアラブルゲルと言った時も実は怒って
いなかったのでしょうか?

…ちなみにシャルナちゃんググってもヒットしませ
んでした。

代わりに「シャルル・アズナヴァール」というどこかで
聞いたことのある名前の歌手が出てきました。

「…あの、どうかしました、シャルナ大佐?」

「文ちゃん」

「はい!」

「HUMIちゃん、HUMIちゃん、Hを飛ばすとウミちや
ん」

「…はあ」

「それはつまり、Hをなくした文ちゃんは文ちゃんでは
ないということ」

「え?」

「つまり文ちゃんの頭の100%はHで出来ているとい
うこと」

「ど、どうしてですかッ!」

「坊やだから」

なるほど、よく分からない。つまり漫才というのは

勢いが大切だということです。

それに、今思えばさつきから本当に『ひとつ飛ばして』のネタばかり考えてしまいます。

まあ、だんだん原型をとどめなくなつて来ましたが。

そしてネタが思いつかなくなつてきた私達は、気晴らしにネットオークションのサイトを眺めることにしました。

「コレなんかシャルナちゃんに似合いそうですね！」

「そう？」

「ところでシャルナちゃんは普段こういうネットでお買い物とかはするんですか？」

「あまり……」

「まあ私もあまりしないんですが、兄はよくするみたいで、この前もボロボロになった小包を手にして『宅配テロだー』とか何とか言っていました」

「ああ、宅配テロなら私にも経験はあるかも」

「へえ、どんなですか？」

「故郷のお屋敷の玄関前に飾る大きなツボを新しくするというところで、ネットで注文したんだけど」

「ツボが割れちゃってたんですかッ!!」

「ううん、それ以前にその大きなダンボールにはツボすら入ってなくて」

「ええ!? じゃあ何が入っていたんです!?」

「機関銃を持った覆面の男が」

「つてソレ本当に宅配テロじゃないですかーッ!!」

「……………」

「……………これで行きましょう!!!!」



すっかり夜も更けて、眠る時間がやってきました。

今日はたくさん頭を使ったので疲れました。

あとは夢の中で爆笑ネタでも思いつけばいいなと思っています。

「ということでシャルナちゃん……その、一緒に寝ても良いですか？」

「え？」

「さつきシャルナちゃんが宅配テロの話なんかしたので、怖くて一人じゃ眠れないんですッ!」

「そう、じゃあ——」

「えへへっ」

「——じゃあソコの床で眠ってもいいけど」

「床ですか!? ……ぐっ、仕方ない、一晩くらいは床で寝ても……」

「冗談、冗談、ひとつ飛ばして冗談」

「な、何を飛ばしたんですか!?」

「眠ってもいいってところ。もう少しだけ文ちゃんとお話したいと思って」

「……はあ。まあそこまで眠たくないのでもいいですけど」

とにかくシャルナちゃんの前で寝転がると、なんだか不思議な気分でした。

誰かと同じベッドで寝るのはいつ以来でしょう。

ある日私はシャルナちゃんと出会って、友達になって…。

その当時はまさか、一緒にお泊まりするほど仲良くなるとは思ってもみませんでした。

シャルナちゃんが横にいてくれるだけで、なんだか安心します。

「そういうえばシャルナちゃんってどこに住んでましたっ

け？」

「インドだけど」

「いや、故郷とかではなく現在の話で」

「私達が初めて出会ったあの場所……覚えてる？」

「…はい」

「あの大通りから南に向かってコンビニ、コンビニ、ひとつ飛ばしてコンビニ」

「…何を飛ばしたんです？」

「私の家」

「ああ。…あのやたらとコンビニがたくさんあるところですか」

「そんなこと訊いてどうするの？」

「それはもちろん、今度は私がシャルナちゃんのお家にお泊まりに行くので」

「……いいけど、散らかってるよ？」

「いいですよ別に。それなら文もお片づけを手伝います」

「……本当に手伝うの？」

「はい！」

「本当に？」

「はい!!」

「本っ当に??」

「は、はい…」

「命かける？」

「……そんなに散らかってるんですか？」

「実はまだ荷ほどきが終わっていません…」

玄関先からダンボール、ダンボール、ひとつ飛ばしてダンボールという状態だから」

「ダンボールだらけですね。ちなみに何を飛ばしたんですか？」

「人が入っていきそうな、大きなダンボール」

「ひいひいっ！ 宅配テロはもう勘弁ですッ!!」

「まあ荷ほどきが終わってないのは冗談だから、来る時は連絡しようだい」

「ふあい」

こうやって二人だけの暗い空間で話していると、なんだかシャルナちゃんがいいつもと違って見えます。

普段見せることのない表情や言動に、私はいつの間にか夢中になっていました。

親友のシャルナちゃんのことなら何でも分かっているつもりだったのに、今は何を考えているのか分からないです。

まあ、フルネームも実はまだ分かってないのですけど。

「文ちゃんは自分がどこで生まれて、どこで育ったのか、覚えてる？」

「え？ そりゃあ日本で生まれて日本で育ったんじゃない？」

「そう。 そうね…」

「ん？」

「……」

「えっと、シャルナちゃんは どうして日本に来たんですか？」

「それはもちろん、文ちゃんのポケにツツコミを入れるため」

「どんな理由ですかそれッ！」

「これは嘘じゃない」

「本当ですか？」

「ええ。 誓った約束を絶対に守る——それが、アーラムギル家の掟だから」

「シャルナちゃん………」

相変わらずシャルナちゃんの言うことは謎が多くてよく分かりません。

唯一分かったことは、シャルナちゃんのフルネームが

シャルナ・アラムギルだったということでした。

おわり。

こけしいろたてロール

著者… ロッキー・ラックーン

イギリス人、カレンは日本人とのハーフ。幼なじみ同士で、ふたりとも忍の事が大好き。今回は帰省中のため登場せず。

【まえがき】

今回も「きんいろモザイク」から登場するキャラクターがいるのでご紹介します。

大宮忍（おおみやしのぶ）

「きんいろモザイク」の主人公の女子高生。イギリス人留学生のアリス・カータレットがホームステイする家に住む。本文中にも出ている通り、色白のおかつぱ頭なので「こけし」そっくりな顔立ちをしているが、本人は「西洋風の顔立ち」と意見を譲らない。とてもナチュラルに酷い言動を発してしまうので、ネット上では「畜生こけし」と呼ばれる事も…。金髪少女を心から愛している、夢中になりすぎて若干変態的な言動もちらほらと出てしまう。果たして今回アリスちゃんは畜生こけしの毒牙にかかってしまうのか…!?

アリス・カータレットと九条カレン

イギリスから留学に来ている二人の少女。アリスは純

※「ハヤテ」サイドのキャラクターは例によって小説板で連載中（しばらく更新はしてませんが）の「しあわせの花」の設定で、ハヤヒナがカップルで二人ともアリスちゃんとともに仲が良い事になっております。

【こけしいろたてロール】

「ヒナ、今日は良い買い物できましたわね」

「うん…でもちよつと私には可愛すぎないかしら？」

「それがハヤテにはどストライクなのですから心配ご無用ですわよ」

高校生の皆様の夏休みも残すところ10日くらいとなつたある日、私——アリスは母親の桂ヒナギクと二人で、街にお買い物に出かけていました。父親の綾崎ハヤテは、本日お世話になる桂家で家事手伝いのお留守番…という訳で、長期休暇中でイチャイチャしまくりの二人を引き離してママを独り占めできるこの時間に私もご機嫌です。

「あら？」

「ん？どしたのアリス」

一通りの買い物を終えて、屋外でアイスを二人で食べていたら、私は見覚えのある人影に気づきました。

「あそこのベンチに座ってる人なんですけど…」

「どれどれ…あ、忍さんじゃないの！」

おかつぱ頭に色白の肌、その「こけし」そっくりないで立ちの主は大宮忍さん。ヒナと仲良くしてくれているアリス・カータレットさんのホームステイ先の高校生の女性です。…なにやらひどく落ち込んでいる様子ですが。

「なんか元気無さそうね…。ちよつと声をかけてみる？」

「ええ。行きましようヒナ」

ヒナも忍さんの萎れ方には気づいたようで、二人で彼女の元へと向かいます。

「こんにちは、忍さん？」

「えっ!? きんば…っ…? 金髪少女!! ヒヤ〜!!…っつて、アリスちゃんじゃないですか」

「ごきげんようですわ、忍さん」

「こんにちは。あ、ヒナギクさんもいたんですね。こんにちは」

最初に声をかけたヒナの姿には気づかず、私の髪の毛に頬ずりをしてくる忍さん。ちよつといきなり距離感が近すぎるスキンシップなのは大目に見てあげるとしましょう。改めて忍さんの状況を尋ねます。

「今日はお一人なんですか？」

「はい。実はアリスとカレンが、一週間ほどイギリスに帰省してまして…」

「そうだったんですか」

「それで寂しくて家でウジウジしてたので、気を紛らわすために出かけてきたまでは良かったんですが、結局気分が乗らなくて…情けないところをお見せしてしまいましたね」

「なるほど」

私の知る限りでは忍さんとアリスさんは本当に仲良し

で、お互いに友達以上の感情を持ち合わせているんじゃないかという節すら見受けられます。そんな二人が一週間もはなればなれになってしまふとなると、この忍さんがこんな状況は仕方の無い事なのだと思います。ついでに言うと、アリスさんもイギリスで似たような感じになっているんじゃないかと容易に予想が出来ます。まだお別れして三時間ほどなのにとというツツコミは野暮というものなのであえてしません。

「忍さん」

「はい？」

「今日、良かったらウチに泊まりに来ない？」

ヒナは私がした目配せの意図を組み取ってくれて忍さんに声をかけてくれました。今の忍さんは一人でいたら気分がどんどん落ち込んでしまうのではないかと考えての結論です。

「えっ!? そんな、いきなり行ったらご家族の皆さんにもご迷惑が…」

「アリス、大丈夫よね？」

「それはもちろん大丈夫ですわ。お婆様もハヤテも大歓

迎との事です。あとは、忍さんさえ良ければなのですが…」

私はヒナが声をかけてくれている間に、スマートフォンでお婆様に許可をお願いしていました。即刻お婆様からの返信が届いて、ハヤテと撮ったゴキゲンな感じの写真が添付されているのを忍さんに掲げました。忍さんは少し考えるような素振りを見せましたが、すぐに決断をなされたようで…

「では、お言葉に甘えてお邪魔させて頂きますね。お母さんに許可を取って来ますので、ちょっと待っててください!」

「うん…つて、ケータイ持っていないの？」

許可を取りに行くと言って、携帯電話も出さずにどこかに行ってしまうようになる忍さんをヒナが引き留めません。

「ハイ。私もアリスもケータイは使えないので持っていないません」

「じゃあ、私のを貸すから使ってちょうだい」

「え、いいんですか？ありがとうございますヒナギクさん」

ヒナの電話で忍さんのお家に電話もかけられて、無事にお母様からの許可も取れたようです。それにしても、忍さんもアリスさんもケータイを持ってないだなんて、華の女子高生としていかなものかと：いえ、これには家庭の事情もあるでしょうから私が偉そうに言う話ではありませんわね。アリス反省ですわ。

◆ 桂家への帰り道、ヒナの気配りで私はずっと忍さんと手を繋いで歩いていました。アリスさんから以前聞いていた話では、忍さんは「金髪の女の子と一緒にいないと死んでしまう病」との事で：偶然にも私は金髪だったので忍さんの命を助けられたようで安心です。

「それにしても、アリスちゃんの金髪は本当に鮮やかで美しいですね」

「毎日ヒナに手入れしてもらってますからね。あ、それと忍さん？」

「はい？」

「私の事は『アリス』と、あの方のように呼んで頂いて構いませんわ」

「そうですか！嬉しいですよ！：じゃあアリスは私の事を『シノ』と呼んでください。仲良しの印です」

「分かりましたわ、シノ」

たくさんの荷物を持って、私たちを氣遣って三步ほど後ろを歩いてくれているヒナに見せつけるかのようにイチヤイチャイチャイチャヤ…。後ろからの嫉妬の眼差しを感じずにはいられません。ハヤテや私への独占欲が強いヒナには、ちよつとイジワルして差し上げたくなってしまふのですわ。

◆ 桂家に到着し、おば様へのお礼を終えました。ヒナはハヤテと夕飯のご馳走作りでキッチンに行き、私とシノはリビングのソファで夕飯が出来るのを待ちながらくつろぎます。

「はふり、アリスう。幸せですう」

「そんなに：匂いを嗅がれると恥ずかしいですわ」

呼び方で距離感も縮んで、シノも金髪成分を補給しようとする。まるであのバカ犬のアルマゲドンのように私の自慢の縦ロールの髪をむさぼって来ます。

「恥ずかしくなんかありません！アリスは女神さまの香りがあります！もっと自分に誇りを持ってください！」

「はあ：」

「忍さん、愛情表現がとてもストレートなのね」

すっかりスイッチの入ってしまったシノの勢いは止められません。女神だなんて：まるでおかしなマンガのおかしなキャラクターみたいにおかしな事を口走ってしまっています。キツチンの方から嫉妬の眼差しを向けていたヒナも、我慢出来ずに割り込んで来ます。

「あつ、ごめんなさいヒナギクさん。ついアリスの金髪に夢中になりすぎて：」

「：すっかり元気になったみたいね、アリス」

「そうですわね」

確かに、今日初めてシノを見た時の陰鬱な雰囲気は完全に消え去ってしまいました。ヒナのおかげなのか、私のおかげなのか、はたまた金髪のおかげなのか定かではありませんが：一件落着ですわ。



ヒナとハヤテ特製の美味しい夕飯を食べ、その後はシノと二人でお風呂に入りました。お風呂上りにヒナとハヤテも含めてトランプをしていましたが、シノは21時にはかなり眠くなってしまいうそうです。私もそうですが、シノに関していえば女子高生なのにとっても健康的だと思いますわ。

「ヒナギクさん、アリスと二人で寝させてもらうなんて：本当にいいんですか？」

「ええ。アリスがそうしたいって言ってるんだし、私は全然構わないわよ」

ここでもヒナが気を遣ってくれて、シノを私と一緒にしてくれようと喋ってくれました。本当は下心があるのはバッチリ把握してますが。

「ヒナはハヤテの部屋で寝るのですから全く問題ありません。むしろ感謝してもらいたいくらいですわ。良かったですわね、ヒナ？」

「残念でした。私は自分の部屋で寝るし、ハヤテは離れに行ってもらおうわよ」

得意気に私に言い放つヒナ。どの口が言うのでありますのやら。やれやれですわ…。

「あら、では夕飯の時に『離れに23時で』ってまばたきで合図してたのは、私の気のせいだったんですわね？」

「うっ、ハヤテと開発した『まばたきローズ』まで読まれてたって言うの…」

ヒナとハヤテも、私やおば様にいじられないように色々と策を練っているみたいですが…無駄無駄無駄無駄ですわよ。

「って、そんな事より！あんまりおしゃべりしすぎて夜更かししないようにね」

「その言葉、そっくりそのままお返ししますわよ。では、

寝ましょうかシノ」

「はい。おやすみなさいヒナギクさん」

「おやすみ、アリス、忍さん」

ヒナとハヤテが去って、シノはゆっくりと私の方へ近づき、後ろから抱き締めてきました。抱き締められる事自体はどうというものではないのですが、流石にこの時期は暑苦しいですわね。

「アリス：今日はお家に誘ってくれて、本当にありがとうございました。アリスは、アリスとカレンがいなくなつて輝きを失った私の魂を救ってくれた女神様ですわね」
「ちよつと大げさですわよシノ。私で良ければまたいつでも会えますから」

「いつでもいいんですか!?では今度はウチに来てください。アリスに着て欲しい可愛い服をたくさん作ってあります！」

「それは楽しみですわね！」

私はアリス。女神だなんて偉そうなものではなく、ただの一人の子供です。でも、ただの子供である私がヒナやシノの幸せな気持ちを産み出す事が出来る事にとても

嬉しく思います。イギリスに行ったアリスさんとカレンさんも、遠い海の向こうでそんな存在となる人と巡り会えているだろう事をお祈りするとしましょう。

「シノとアリスさんとの話、いろいろ聞かせて頂けませんか？」

「ハイ！たくさんたくさんありますよ。じゃあ、私がホームステイして初めて出会った日の事から…」

眠ってしまうまでの短い間、シノとの楽しいおしゃべりはまだまだ続きそうです。



「ハヤテえ〜！アリスが忍さんに取られちゃうよお〜…」

「何を言ってるんですか。ア〜たんのママがヒナ以外の人に務まるわけじゃないじゃないですか」

「ホントお？ホントにそう思ってる？」

「はい。100パーセント本音ですよ」

「じゃあ褒めて！」

「フアツ？」

「アリスのママは私だけだつて褒めて褒めてえ〜」

「まったく、甘えんぼなママがいたものですね。おおーよちよちよち、ヒナちゃんは偉いでちゅね〜」

「もっともっと褒めて。パ。パあ〜」

読者の皆様、ご安心くださいませ。ハヤテとヒナですわよ。23時に眠気覚ましにハヤテのいるという離れを覗きに行くと、案の定イチャイチャイチャイチャと…。私は慣れっこではありませんが、シノはかなり恥ずかしいよう興奮してしまってます。

「とまあこんな風に、あの二人は自分たちでストレスのガス抜きをしてるので皆の前では大人でいられるのですわ」

「な、なんだかともないものを見てしまったような気がします…スゴイですねこれ」

翌朝、なんの変わりも無く朝食を作って振る舞うヒナの姿を見て、シノは大人というものを一つ知ったそうです。まったくやれやれですわ…。

【おわり】

それが一番！

著者…サタン

広がっていく血だまりに靴底が濡れる前に踵を返すと、首元を緩めながらハヤテに悪寒が走った。

「こいつ血を流しながらニヤニヤしてる……気味が悪い！ 早く帰ろう……うわ、カバン教室だ」

…

「うわああああああああああああ！ 疾風のごとく！ 疾風のごとく！」

広大な校庭に風を切る効果音。

鳥が何事もないように飛び立つ下で、荒く息をつく綾崎ハヤテは額の汗をぬぐった。

「死に果てる！ この変態が……！」

キレるとヤクザになるという噂の執事も、暫定必殺技二連撃は堪えてしまう。

しかも、何故か幸せそうに微笑みながら、芝生に血だまりを広げてピクピクしている。

これだけ痛めつけても明日には復活するのだから一流の執事は恐ろしい。

今日は最悪だった。授業が終わった直後に乱入した変態執事に迫られて窓から大脱出。

以来今までハヤテは、貞操のかかった鬼ごっこをさせられていた。大袈裟じゃなく本当にかかっているから恐ろしい。

冬の日が落ちるのは早い。脱出時まだ薄青かった空は、しだいに赤くなりつつある。

背後に横たわる亡骸から携帯の着信震動が聞こえたが、無視してハヤテはその場から逃げるように教室に向かった。

長い影を伸ばす商店街に、男女一組の高校生が歩いている。

と言っても、少年の方は執事服を着ているため、傍目には女子高生と執事が歩いているようにしか見えない。

執事服の少年、綾崎ハヤテの隣を歩いてるのは、ハヤテのクラスのいいんちよさんこと、瀬川泉だった。

二人が一緒に下校しているのには理由がある。

カバンを取りにいったハヤテは、携帯片手に迎えが来るのを待っていた泉と出くわし、

泉の迎えを担当していた変態執事を半殺しにしたハヤテが、お詫びに送ることを提案した。

泉は持ち前の明るい笑顔でそれを了承し、こうして二人並んで歩いているのだった。

もともと明るく裏表のない性格の泉と、穏やかで気配りができるハヤテは相性は悪くない。

とびきり盛り上がる話はなかったが、仲の良いクラスメート同士といった雰囲気でお話を楽しんでいた。

無言でいるのが苦手なのか、話題を振るのは泉の方で、ハヤテが穏やかにそれに答えるという形が多い。

傍目からは、二人は理想的なお嬢様と執事にも見えた。

「あ、たい焼きだ。ほらほらハヤ太くん。たい焼きだよ？」

「わかりました。今日のお詫びに奢りますよ」

「わーい♪ 虎鉄くんだと経費で落とされるから奢りって感じがしなくってね」

両手を挙げて心から嬉しそうに笑う泉に、ハヤテが苦笑する。

ここまで素直に喜ばれると、奢り方としても悪い気はしなかった。

「——って、たい焼き、経費つか」

「そうなの。カメラとかNゲージ？ とかにお金使うみたいですよごく細かいんだよ」

執事として、積極的に経費で落とす金銭感覚を覚えるべきかと、ちよつと考えるハヤテ。

購入を済ますと、個別に紙袋に入っているたい焼きを一つ手渡した。

「熱いですよ」

「うん。ありがとう」

泉は瞳を輝かせて、小さな両手でたい焼きを受け取る。

頭をちよこんと出させると、湯気と共に甘くて香ばしい匂いが広がった。

店を後にして歩くのを再開する。恐怖の鬼ごっこで空

腹になっていたハヤテの口に、たい焼きの甘さが心地よく響く。

その隣で、泉は小さな口であぐあぐとたい焼きを食べながら、話を続けた。

「だから、ちよつとナギちゃんが羨ましいかなー」

「——え？ どうしてです？」

「ほら、ハヤ太くんはお友達って感じがするから。側にいてくれたら楽しそう♪」

経費に落とすのは隠れてするか控えるかのどっちかがいいのかな、とハヤテは思った。

その一方で、いやでも執事的には、お友達に見られるというのは果たして良いのか悪いのか、とも思う。

軽く考えこむハヤテの隣で、たい焼きの味に満足してか、泉ははあつと白い息を吐いて、にこつと笑った。

「たい焼きも奢ってくれるしね♪」

「今日だけですよ？」

「ちえー……あははっ」

軽く諫めるように言うハヤテに唇を尖らせた泉が、楽し

げに声を上げる。

その屈託のない笑顔を見て、ハヤテもまた笑顔を浮かべた。

学校のこと——主に外国語履修の大変さを話しながら歩いてみると、不意に泉がハヤテを呼び止めた。

商店街から一本外れた道にある小さな空間を指差し、首をかしげる。

「ね、ハヤ太くん。あれ公園かな？」

「えつと……そうみたいですね」

袖を引かれたハヤテが彼女の指を差すほうを見て答えると、泉は猫耳をひよこつとさせるように笑顔を閃かせた。

「ちよつと寄っていい？」

茜色に照らされた公園には、誰もいなかった。

そろそろ陽が完全に落ちようかという時間帯なので、子供は帰宅したのだろう。

夜遊びする子供が使うには早いし、今はちよつとした空

白の時間帯になっっているようだった。

小さな滑り台、小柄なジャングルジム、小さなブランコ公園には三つの遊具と、ベンチが一脚ある。

公園の規模に対して、それが充実しているのかどうかは公園であまり遊んだことがないハヤテにはよくわからなかった。

たい焼きの最後の一口を食べると、泉はばたばたと軽い足音で駆けていく。

彼女が目指した先には、二つの椅子がぶら下がったブランコがあった。

チャコンと金属音を立てて、ブランコに両脚を乗せる。

「よつと……わわっ……よーしっ」

バランスを保つと、身体を前後に揺さぶって、キイコ、キイコ、と立ち漕ぎを始めた。

「よいしょ、よいしょ」

制服に包まれた身体をせつせと動かす泉に、たい焼きの

包み紙をゴミ箱に捨てたハヤテが追いつく。

「スカート、気をつけてくださいね」

「大丈夫だよー 今日には下にスパッツ穿いてるもん」

上機嫌に応える泉に微笑んで、ハヤテは少し躊躇うようにしながら隣のブランコに手を触れた。

キイキイと揺らしてから、そつと革靴の底を乗せてみる。感触を確かめて、両脚をブランコに乗せる。

『あ、立てるかも——んがっ！』

脚を伸ばして立つと、頭がブランコの上に走る支柱にぶつかった。

ゴツツと鈍い音がしてブランコ全体に震動が走り、ハヤテの視界に星が散る。

「いたた……」

「あははっ！ どうしたのハヤ太くん？」

軽くピヨッて頭を抑えるハヤテに、泉が笑い声を上げる。赤面したハヤテが崩れ落ちるようにブランコに座ると、

泉はびよんとブランコから飛び降りた。

髪留めで結われた小さな髪房がびよこんと揺れ、スカートがひらりと舞う。

「ちよっと失敗しました」

「大丈夫？ 怪我してない？」

苦笑するハヤテが抑えている頭を、泉はそっと手を添えて覗き込んだ。

少し運動した泉の身体から、汗と香水が混じった香りが漂ってくる。

制服に包まれた胸が目の前に突き出されると、ハヤテは頬を染めて視線を外した。

「大丈夫ですよ。いや、子供用の遊具って、結構小さいものなんですわね」

相手の体温を感じる距離に少し戸惑いながら、照れ隠しのように言う。

それを聞いて、泉は嫌味のない明るい調子で笑った。

「あはは、当たり前だよー 子供用だもん……うん、大

丈夫そうだよ」

「ありがとうございます」

「いいinchよさんだもん、これくらい当たり前だよー」

札を言われた泉は少し照れたように言うとお礼のお札をするように、ハヤテの頭をよしよしと撫でる。

『うわ……頭撫でられてる……』

それは、自他共に認める年上好きとしても、照れざるを得ないシチュエーションだった。

検査を終えた泉がパツと離れると、ハヤテは撫でられた頭を、もう一度すりすりとお撫でる。

泉はぱたぱたと自分のブランコに戻ると、また底板の上に立ち上がった。

今度は漕がずに、少し高くなった視界を楽しむように遠くを、夕焼け空を見つめる。

薄い雲が流れる空には、どこかへ帰る鳥の群れの姿があった。

珍しく無言の時間が流れたあと、キイコ、と小さく漕いで、泉が口を開いた。

「いいんちよさん家はさー」

少し変わった語り口を聞いて、ハヤテが顔を上げる。

「結構過保護だったから、小さい頃はあんまりお外で遊べなかったんだー」

視線に気付いて笑顔を浮かべ、前を見つめたまま言葉を続けた。

「だから、こういう公園って少し憧れなの……ハヤ太くんは？」

少し踏み込んだ内容を誤魔化すように、キイコ、キイコと揺らす。

「僕も、公園で遊んだことはほとんどないです。色々稼がなきゃならなかったですから」

環境は全然違うというのに、変わった接点があることが奇妙に面白くて、声を落とすことなくハヤテが答える。泉もハヤテの家庭環境には深く突っ込まず、相槌を打つ

たあと、少し間をおいてあつけらかなとした声を出した。

「そっかー……うん、じゃあ決まりだね」

「はい？」

「一緒に遊びたまえ、ハヤ太くん。まずは缶蹴りなどはいかななものかな？」

親指をビツと立て、ウインクする。

『さっきの導入は、この提案の照れ隠しですか……』

「はい、いいですよ。望むところです」

元気に笑って提案するいいんちよさんに、ハヤテはなんだか可笑しくなって笑顔で応じた。

太陽が沈みきるまでの短い間、ハヤテと泉の二人は子供時代に戻ったかのように遊んだ。

冬の澄んだ空気に明るい声が響く。公園に面した道に人が通りかかることがあっても気にならない。ハヤテは自分が過ごせなかった普通の子供としての時間

を、少しだけ取り戻せたような気がした。

ひとしきり遊んだ二人は、ジャングルジムのでっぺんに並んで座り、星が瞬き始めた空を見上げる。

遊びの余熱と余韻が引いた頃、泉は少し迷った後に口を開いた。

「そういえば、ハヤ太くんは歩ちゃんとはまだ付き合っていないんだっけ」

「——え？　なんですか、藪から棒に」

突然降って沸いた恋バナに、ハヤテが素っ頓狂な声を上げる。

急に話題を振った泉は、少し言葉を濁しながら、それでも話を続けた。

「んー いや、何となく聞いてみよっかなって」

「思いつきですか……」

諦め混じりの苦笑を聞いて、泉はクスクスと笑う。

隣に座りながら空を見て話すという距離感は、悪くないものだった。

ハヤテに顔を向け、人差し指を立てながらウィンクする。

「まあ諦めたまえ、女子高生の会話の半分は恋バナできているのだよ♪」

「それは、仕方ないですね。　はい、付き合っていないませんよ」

冬の乾いた風が吹き、まだ熱を持っていた身体を撫でていく。

髪を柔らかくなびかせる執事服の少年は、ちよつとだけ大人びた顔をして答えた。

「金銭面で面倒を見る甲斐性を身に付けなきゃいけないんだもんね？　大変だ♪」

「そうですね、大変です……でも、好きになるとか、付き合うっていうのが、良くわからない部分もあるのですか……」

ハヤテが泉の方を向くと、二人の視線が合う。

軽く微笑むと、ハヤテは泉をじっと見つめながら質問した。

「瀬川さんは恋人が出来たら、どんなことをしたいです

か？」

真剣とも冗談ともつかない、軽い口調の質問だった。

自分から話を振ることが多かった泉は、ここに来て話を振られてちよつと戸惑う。

自分から振った恋バナ、しかもハヤテに悪気はないだけに逃げられない。

うーんと、と真剣に自分の心に尋ねたあと、答えに辿り着いた泉はこくこくと頷いた。

「私は、遊びたいかなー」

「遊びたい？」

「うん。一緒にたくさん楽しいこととして、一緒に笑うの。きつとすぐこく楽しいと思うよー」

肩を竦めるようにして両手を膝の上で合わせ、にこつと笑う。

少し照れたようなその笑顔は、暗くなった空の下で見るとは惜しいほど可愛らしいものだった。

「なるほど……遊ぶ、か……」

ハヤテは何か感じるところがあったのか、少し目を丸くしてから真面目な調子で頷いた。

何やら真剣に吟味されている様子に、赤面した泉がわたたと手を振る。

「いやいやいや、そんなに真剣に考えないでよ、もー！
恥ずかしいじゃない！」

「え、あ……すみません。そんなつもりは」

伸ばした手でバシバシ叩かれてグイグイと押されると、ハヤテも考えを中断して笑顔を返す。

からかわれたと感じたのか、今度は泉がハヤテに質問した。

「もー……今度はハヤ太くんの番だよ！ ちゃんと考えないと怒るんだからね？」

頬を膨らませる泉に少しすまなそうに微笑むと、ハヤテは空を見上げて考える。

暗く透き通る青い空には、白く小さな星がちらちらと瞬きはじめていた。

泉がじっと待っていると、ややあつてハヤテが口を開く。

「そうですね。僕は、側にいたいです」

「側に？」

「はい。好きな人に必要とされて、側にいられることが出来れば、幸せなんだと思います」

ハヤテの言葉に、泉は少しキョトンとした顔をしていた。それがハヤテなりに真剣に考えた末の答えだということに理解していたが、お互いの感覚に大きな隔たりがあつて、内容を上手に理解することができない。

「……なんだか、女の子みたいな答えだねー でも」

少し困ったような顔をして応えたあと、空を見て、うん、と頷く。

「ハヤテくんの恋人になる人は、きつととても幸せになれるんだろうね」

にこっと笑つて、ハヤテの気持ちを肯定した。素直に褒

められたハヤテの頬が染まる。

笑顔を緩めて優しい表情をした泉と、少し驚いた表情のハヤテが見つめあう。

ハヤテの表情に気付くと、泉が小首をかしげた。

「どうしたの？ ハヤテくん」

「いえ、ちゃんと名前を呼んで貰えたから、ちよつと驚きました」

「えー？ ありや!？」

どうやら無意識のうちに出てしまったらしい。自分の言葉を思い返して、泉自身が驚いた声を上げた。あからさまに驚いたリアクションをして、手を口に当てる。

「あれ？ あれ？ なんてだろ。えーとえーと、ハヤテくんハヤテくんハヤテくん……」

眉間にシワを寄せて必死に修正しようとする、今度はハヤテが驚く番だった。

「わー！ 待つてください！ そんな必死に言い直さな

くても！」

「いや、これはいいんちよさんのアイデンティティに関わる重要な問題だよ！」

「そんなあ！ 意地悪しないでくださいよー！」

ハヤ太ハヤ太と繰り返す泉を、ハヤテは必死になって揺さぶった。

夜が少しずつ深まっていき、外が深い紺色に覆われはじめた頃。

二人はジャングルジムから降りて、服を軽くはたく。思ったより長くなってしまった寄り道が終わりを告げる。今日はもう帰る時間だった。

「それにしても、僕の名前、ちゃんと覚えてはいたんですね」

「あはは、バレちゃったかー でも大丈夫！ これからも仲良しさんらしくニツクネームで呼ぶから！」

「はあ、もう諦めましたよ……でも、たまには本当の名前で呼んで欲しいです」

「どうしよっかなー あははっ！ 考えとくよ」

ジャングルジムに立てかけていたカバンを手にとって、帰宅の確認を軽く目配せをする。街頭の白い明かりに照らされながら、身なりを整えた泉がそれに応える。

「じゃ、行きましようか」

「うん。そうだね」

泉を伴ってスタスタと歩き出したハヤテがふと見ると、ベンチに一人の若い男が座っていた。

やや体力ゲージが尽きかけている風情のその逞しい執事は、ハヤテをじつと見つめながら近づく。

「あ、綾崎！ オランダに行つて私と結……」

「疾風のごとく！」

「ぎゃあああああああああああああああああ！」

住宅と商店が立ち並ぶ街の一角に衝撃波が走る。

ノータイムで暫定必殺技を発動したハヤテは、ぜーぜーと肩で息をしていた。

我が身に降りかかる不幸をひとしきり呪うと、はーはー

「……と深い息を吐いて考えを切り上げる。
嫌なことは早く忘れたほうがいい。　　とうか、どうか
なかったことにさせてください。　　サンタさんとか天の
声の中の人ー！」

ハヤテは何事もなかったように振り返ると、呆然として
いた泉に声をかける。

「さて、オチもついたことですし、帰りましょう」

「え、あーうん、そうだね」

心を立て直して明るく笑う泉に微笑を返してから、視線
を動かして公園を一望する。

親の代わりに働いていたハヤテは、確かに公園で遊ぶ子
供たちを羨ましいと思っていた。

けれど、遊んでいる子供たちに対して、他にもう一つ羨
ましいと思っていたことがあった。

優しい親の――誰かの、出迎え。

それは時間を見つけたハヤテが誰もいない公園で遊んで
も、決して得られないものだった。

寂しかった頃のことを思い出し、少し落ち込んでしまっ
たハヤテは、俯いて前髪で表情を隠す。
そんなハヤテの執事服をちよいちよと摘み、泉がにこつ
と笑顔を浮かべた。

「今日はありがとうね、ハヤテくん。　　美希ちゃんたち
とはこーゆー遊びできないから助かったよ。」

ハヤテくんだったら、きっと呆れないで付き合ってく
れるって思ったんだー　　思った通りだったよ♪」

屈託のない笑顔だった。感謝が伝わるようにだろうか、
こだわっていたあだ名を今は使っていない。

その明るさに照らされるように、ハヤテも心の調子を取
り戻していった。

「……はい。　　僕の方こそ、楽しかったですよ」

ハヤテも心からの言葉を返し、お互いに笑顔を浮かべる。

「……さあ、では、帰りましょうか、瀬川さん」

「うん。　　では、帰ろうか、ハヤ太くん」

少し近づいた距離を整えてクラスメートに戻るよう
に、二人は公園を後にする。

商店街はいくつか店が閉まり、人影も減って少し寂しい
雰囲気か漂っていた。

ハヤテの隣をてくてくと歩いてきた泉は、不意に思い出
したように口を開く。

「それにしても『側にいたい』かー 私の考えってちよ
つと子供っぽいのかなー なんか恥ずかしーよー」

うーっと照れながら考えこむ泉に、ハヤテが苦笑する。

自分の答えの原因に、ハヤテは気付いていた。公園を振
り返ったときに抱いた寂しさ。

それが誰かの側にいたいという願望を生んでいることに。
だからこそ、泉の単純で前向きな答えが響いていた。

泉に心変わりをしてほしくなくて、ハヤテが口を開く。

「そんなことないですよ。一緒に遊ぶっていう考え、
素敵だと思います。僕は遊ぶのが苦手だから、すごく参
考になりました」

「……ホント？」

「はい、こんなことで冗談は言いませんよ」

一瞬だけ隣を歩く泉と視線を合わせて、再び前を向く。
心の内を見せた言葉を受け入れるように穏やかに肯定さ
れると、泉の頬が赤く染まった。

「そっかー じゃあさ」

頭の後ろを撫でながら照れたように笑っていた泉は、て
てと少しだけ駆けて先を歩く。

革靴の爪先を立てて、くるっとターンすると、照れを隠
すように、とびっきりの笑顔で言った。

「ずっと側にいて、一緒にたくさん楽しいことができ
ば、完璧だね♪」

「……はい、きつとそれが一番です」

ハヤテも心からの笑顔を返して、相槌を打った。

二人の合わさった結論がとても理想的に思えて。

END



初芝ヒスイ登場・新世界の神話外伝

著者・R I D E

王玉を返したことで、ナギは三千院家の遺産相続権を取り戻した。

ナギたちはお屋敷に戻った。そこへ千桜たちが遊びに行った。寂しがつているであろうナギのために。

ナギたちは今、ゲームで遊んでいる。千桜やカユラ、アリス、歩、ヒナギクたち。

他にも、霊神宮との戦いで通じてできた仲間たちもいる。

「あー！おまえ、そんなテクはずるいのだ！」

「なんだよ、真剣勝負なんだからいいだろ！」

ゲームで今ナギと対戦しているのは、岩本エイジ。霊神宮の戦いでナギと一緒に戦った仲間だ。出会えば毎回のようにケンカしてしまうが、特別仲が悪いという訳ではなく単にケンカ友達といった感じである。今のところは。

「まったく、しんみりした空気が一転して賑やかになったな」

一歩離れたところでナギたちを眺めているのは、高杉

ダイ。彼がここに来たことで、ナギやハヤテたちは戦いに参加せずエイジのような者たちと仲間になることはなかっただろう。

まあ、その戦いがどんなものだったのかは長くなる上、特にこの話に絡むということはないのでここでは触れないでおく。

「おまえは参加しないのか？」

遠くから離れているダイに千桜が声をかける。戦いを通じて、両者の距離感というものは縮まってきている。

まあ、千桜にしてもっと彼に近づきたいと思っているようにも見えるが…。

「折角来たんだから、遊ぶさ。それより…」

ダイは窓の方に目をやる。

「外でSPの連中が騒がしくしているが、何かあったのか？」

「そうなんですか？」

それを聞いたマリアも、窓を覗き込んだ。

確かに、SPの人たちは慌てふためいている。それも、尋常ではない様子で。

「お待たせしました」

そこへ、ハヤテが紅茶とお菓子を持って戻ってきた。

「なあ、外が騒がしいが、何かあったのか？」

部屋の外にいたハヤテに尋ねてみたが、彼も首を傾げていた。

「いえ、僕には…そういうえば、クラウドさんも急いでいたみたいでしたけど」

クラウドが動くということは、余程の事態ということなのだろう。一応彼は執事長なのだから。

そんな外の様子など気づいていないのか、ナギたちはゲームに夢中になっている。

「よおし、今度は私の番だ」

「カユラか、わかったわかった」

などと、皆がゲームに夢中になっていた時だった。

渦中の人間は、この場にやってきた。

「おやおや、楽しそうだな」

いきなり部屋の扉を開け、部屋に入ってきた人物が二人。

逆光がかかっている、顔はまだよく見えない。だが、その中でハヤテは見知った顔を見つけた。

「あ、あなたは…」

メイド服ではあるが、何度か会ったことのある女性だ。

「あらあら、お久しぶりね綾崎君」

女性は、次にダイの方を向く。

「それと、高杉君も」

その女性の口からダイの名前が出てきたことに驚いた。「おまえ、こんな可愛い人と知り合いなのか？」

千桜が少し怒ったような調子でダイに聞いてくる。だが、当のダイは…。

「あんた、誰だっけ？」

メイド服の女性は眉を一瞬引きつらせたが、すぐに笑顔をとり繕う。

「酷いですね。私たち、あんな緊迫したやり取りをやったっていうのに」

「おい、本当に何したんだ？」

千桜が睨みを一層増してくるが、ダイは唸るだけだ。

メイド服の女性も体を怒りで震わせてきた。

見かねたハヤテがそつと耳打ちしてくる。

「ムラサキノヤカタの隠れ部屋で、僕たちと戦ったじゃないですか？」

「そうだったか？」

言われても思いだせないダイは、あるものを取り出す。

それは、【ハヤテのごとく！公式同人誌】。それを開いて確認する。

少しずつ、ダイの脳裏にある光景が浮かび上がってきた。

隠し部屋で、何か戦っているような気配を感じた。その少し前から、不細工な犬がこのアパートを監視しているのではないか。全く不機嫌だ。

気になって入ってみれば、妖しい奴がハヤテたちと戦っている。

その女が、こちらを見てきた。鬱陶しかったので、睨みを利かせてやった。

その途端、女は逃げ出していった。

ダイは、ようやく思い出すことができた。

「ああ、俺の一睨みで逃げ出した臆病者か」

その一言でメイドの女の怒りが頂点になったが、ダイはそれも気にしなかった。

「ええっと、名前は……………」

「法仙夜空だ！」

誰かは思い出したが、公式同人誌を見ても名前を思い出さなかったのだ。遂に法仙夜空自身が名乗り出たのだった。

ここまでコケにされると、怒鳴るのも無理はない。

「法仙、知り合いなのか？」

「ええ。特に綾崎君は、ナギお嬢様の執事ですよ」

それを聞いて、少女はハヤテに顔を向けた。

「ああ、おまえが姫神の後任か」

少しずつ少女の顔がはつきりとしてくる。

特に目がいったのは、右目の大きな傷だ。一体何の傷なのだろうか…。

そもそも、この少女は何者だろうか。

「久しぶりだな、ヒスイ」

ナギが少女の名前を呼ぶ。

「ヒスイって…」

それを聞き、ハヤテは察する。

「まさか、お嬢様と遺産相続権を争っているという…」

「俺も聞いたことあるぞ。ナギさんには咲夜さん、伊澄さん、ワタルと後一人幼馴染がいるって」

エイジも緊張の表情で少女を見る。

「まさか、あなたがその…」

「豆柴、ヒスイ…!」

エイジが名前を言い間違えた瞬間、部屋の空気が数度下がった気がした。

「豆柴じゃない…」

名前を間違えられた少女は、とてつもない殺気を放ってきた。

「初芝だ」

そして、テーブルにあったフォークを手に取ると、そ

れをエイジに突き刺そうとしてきた。

不意だったことと、対処できない速さにエイジはただ息を飲むばかりだ。

しかし、フォークはエイジに突き刺さることはなかった。

「名前間違えられたというだけで、流石にやりすぎじゃないですか？」

ハヤテが間一髪のところ、初芝ヒスイの腕を掴んで止めたのだ。

ヒスイはハヤテを見る。殺気は収まったが、傷の走った目はこれから狩る獲物を見るそれであった。

そして、エイジもヒスイを見る。

「だ、大丈夫かあんた。今気づいたけど、目が血走ったままだぞ」

このバカ！

全員心の中でエイジに対してそう思った。

ヒスイは再び殺気をエイジに向ける。さすがにエイジも言い過ぎたと察した。

「わ、悪い！悪気はないんだ豆柴さん！」

「初芝だ」

隙を見てハヤテを振り払い、今度こそエイジにフォークを突き刺そうとする。

「やめろ」

その瞬間、ヒスイの動きが止まった。

「少しは場をわきまえろ」

ダイだった。彼はヒスイほど荒立ってはおらず、彼女とは異なる気を発していた。覇気、というべきなのだろうか。

「…なるほど、夜空が逃げ出すのもわかるな」

ヒスイは余裕を取り繕うが、若干はダイに気圧されたようであった。

「まあ、いいか」

ヒスイはハヤテやダイを見る。彼女は、二人を標的と認めたようだ。

「ていうかヒスイ、おまえ何しに来たのだ？」

ナギがようやく本題へと話を戻す。

「せっかくみんなと遊んでいたのに」

「そうだそうだ、雰囲気ぶち壊しやがって」

「エイジ君、大半は君のせいだと思うんだけど」

空気となっているヒナギクたちがエイジに非難の目を向けた。

「ふっ、おまえが三千院家の遺産相続権を取り戻したというから、挨拶しに来ただけだ」

ヒスイはわざとらしく悲劇の少女のように振る舞う。

「これでは私が三千院家を継げない。酷い話だと思わないか？」

「知るか。そんなことはあのジジイに聞け」

至極もつともなことを口にするナギ。いつものような不遜な態度だが、どこかヒスイに対して慎重な様子も見える。

「そうだな。それに、挨拶はもう済んだ」

はっきりと口にはしないが、それはヒスイのナギに対する宣戦布告のようなものであった。

「また会おう、ナギ、綾崎ハヤテ。そして…」

ヒスイはそこでエイジを見る。

「一応聞くが、おまえの名前は？」

「い、岩本エイジだ」

「エイジか。覚えておく」

エイジも今度は闘志を込めて宣言した。

「俺だって！次あった時は目に物見せてやる！覚悟するんだな豆柴さん！」

瞬間、エイジの頬をフォークがかすめた。

「豆柴じゃない、初芝だ」

そう言い残して、ヒスイは夜空と共に去っていった。

夜空はダイを恨めしそうな目を向けていたが、当のダイは知らん顔していた。

「あの人が…初芝ヒスイ…」

「過激な奴だろ？」

ナギの言うとおりで、ハヤテは実感した。

あの少女は、自分とナギの最大の障害になる。

「まあ、あいつのことは今置いといて皆来てるのだ。遊びの続きをしようじゃないか」

皆がゲームを再開する中で、ハヤテは心に誓う。

改めて、ナギを守ると。

それから、何日か経った後。

三千院家の屋敷で、クラウスがヒスイたちの手によりピンチに陥ったとの報せが咲夜のもとに入った。

ハヤテやナギたちは動くことができないため、咲夜の手を借りたことだ。

咲夜のもとには、ハンバーガーを求めてやってきたマキナ、遊びに来ていたエイジ、別の要件で咲夜を訪れていたダイがいた。

「悪いけど、あんたらも一緒に来てくれへん？」

咲夜はマキナたちに救援を求めた。

「ウチ、ヒスイがちよっと苦手なんや。手段を選ばんあいつに、知的な私が敵うはずがないやろ？」

この言葉に、一同は。

「寝言は寝て言え」

辛辣なことを言うダイ。

「なんでもいいが、ハンバーガー買ってこるついでにつき合うぞ」

あくまでハンバーガーが目的なマキナ。

「とにかく、豆柴と決着がつけられるならいいぜ」

ヒスイと決闘する気満々のエイジだった。

「言いたい放題やな」

咲夜はもはやツツコム気力すら失せていた。

「とにかく、クラウドさんのところへ一緒に行ってもらうで」

「俺は行くと言ってねえだろ」

やる気のないダイだが、咲夜が更に一言。

「じゃあ、ハルさんについていってもらうおうかな？」

これを聞き、ダイは若干顔をしかめた。過去に彼女が事件に巻き込まれたため、千桜の名が出されるとダイは押しが弱くなってしまう。

「ウチ一人じゃヒスイにやられてしまうし、ハルさんでもいてくれたら助かるし……」

「あいつじゃ大した助けにはならん」

咲夜は我が意を得た顔となる。

「ただ、ただ働きは勘弁する。報酬を希望する」

「任せとき。納得のいくものを用意するわ」

これでパーティは全員そろった。

四人はクラウドのいる三千院家の屋敷に入っていった。そこで待ち受けていたのは、捕まったクラウドと、ヒスイ、夜空だった。

「おまえが来るとはな、咲夜」

「できればウチはおまえと揉め事なんて勘弁やけどな」

咲夜は強張らせていた。対峙するヒスイからは冗談ではすまされない覇気が発されていたからだ。

「岩本エイジまで一緒とはな」

「決着つけにきたぜ、豆柴さん」

瞬間、エイジに向けてとてつもない殺気が放たれる。

「豆柴じゃない、初芝だ」

「高杉君、あなたも来たのね」

夜空はダイを狙いにつける。

「えっと………。あんた、誰だっけ？」

だが、ダイはとつくに夜空のことを忘れていた。

「おい腹ペコ蛇、おまえ知ってるか？」

「うーん……わからない」

「法仙夜空だ！」

夜空はダイと戦う気満々だ。

「クラウスさんを解放する気なんだろうが、そうはいかない」

夜空は宝石のようなものを取り出すと、それを床に向けて投げた。

瞬間、それはロボットのようなものを1体誕生させた。

「まずはこいつと戦ってもらおう」

怪しげな術を使う女、それによって誕生したロボット共々、注意しなければならぬ。

ダイもそんな警戒している。そう思われていた。

「腹ペコ蛇、こいつとあのメイドはおまえに任せた」

だが、なんとマキナに丸投げしてきた。これには夜空も驚いた。

「な、なぜ彼に任せる？ 私たちはおまえを狙っているんだぞ」

「だってな…」

ダイは面倒くさそうにロボを指差した。

「こんな不細工なロボあいてに、俺が出るまでもないだろ」

「不細工…?」

その言葉は、夜空にショックを与えた。しかしダイは追い打ちをかける。

「加えて、こんな不細工なロボしか生み出せない奴の実

力も、たかが知れている。この蛇で十分だろ」

ここまで見下されると、怒りを発せられずにはいられない。

「いいだろう。そいつを倒したら、次はおまえだ」

「万が一、いや億が一にでもそんなことになったらな」

そして、マキナとロボ、夜空の戦いが始まった。

一方でヒスイの方は。

「咲夜さん、ここは俺が」

エイジがヒスイの相手を引き受けようとしていた。

「ええんか？」

「女の子を危険な目に合わせるわけにはいかないから」

この言葉に、若干だが咲夜はときめいてしまう。

「なんや、エイジ君がそれを言うなんて生意気やな」

半分照れ隠し、半分本音を返す。

どう受け取ったかはわからないが、エイジはそれを聞

きヒスイへと向かう。

「おまえが相手か」

「ああ。この前はビビリすぎたけど、もうそうはいかないぜ」

「豆柴さん」

瞬間、ヒスイはエイジに殴りかかってきた。

「豆柴じゃない、初芝だ」

エイジはヒスイの拳を慌ててかわす。

そこからはその繰り返しだ。ヒスイが攻撃して、エイジがかわす。

このやり取りが続くと、エイジはさすがにいら立つだろう。

「どうした、避けるだけが精一杯か？」

エイジのフラストレーションが限界に近づく。咲夜はそう思っていた。

「おまえの素性は知っている。おまえはまだ本気を出していない、やる気がないのか？」

「いや、決着はつけたいたいけど殴り合いは嫌だなんて思っただけだ」

「負け惜しみか？」

しかし、エイジは冷静に、そして信じられない様なことを言った。

「だって、おっかないとはいえあんたも女の子だから」

「なっ…」

これには、ヒスイも咲夜も絶句してしまった。

「例え危険人物でも、女の子に対して本気で殴り合うなんて俺にはできないよ」

「…ふざけるな」

女だからという理由で、戦う相手とみなされてないと思いきや、それではヒスイの高いプライドを傷つ

ける。

怒りのまま、エイジに殴りかかろうとする。

「だからさ！」

その拳を、エイジは払いのけながら言った。

「こんな荒っぽい方法じゃなくて、別の方法で決着つけようぜ」

悪意のない真顔で提案してくるエイジ。

この男は、ヒスイを舐めているわけではない。むしろ相手として認めているのだ。

だが、既にクラウスを捕まえている以上、簡単に矛を収めることはできない。

「そこまでだ」

だが、いつの間にかダイと咲夜がクラウスを救出していた。

「もうおまえらが戦う理由はない、退け。それでもまだやるといふのなら…」

ダイは、ヒスイと夜空を睨む。

「痛い目見るぞ」

初対面の時と違い、凄みを増した覇気。

これには、流石のヒスイも気圧されてしまう。

「…退くぞ、夜空」

どの道人質は解放された。ならば自分たちがここに

る理由はもうない。

最後にヒスイはエイジに言った。

「何で勝負するにせよ、私は勝つまでやるからな」

「俺だってそうだ。負けないからな豆柴さん」

「豆柴じゃない、初芝だ」

夜空のほうもダイに宣言する。

「次はもつとかつこいいいものを用意するから、覚悟しておくのだな」

「わかったよ。ええっと……」

「法仙夜空だ！」

そうして、二人は屋敷から去っていった。

「初芝ヒスイ、危険な女だな」

ダイはヒスイの人となりをなんとなく察していた。

強欲で、過激で、そして負けず嫌い。

あの少女は、これからもハヤテの敵になり続けるだろう。

「なあに、豆柴さんには負けなさいさ」

「初芝な」

エイジにとっても、ある意味で敵となり続けるに違いない。

「さてと、ハヤテたちに連絡入れなさいとな」

もうひとつ、わかったことがある。

危険だが、皆が恐れるような人物ではない。ヒスイと、あと……あのメイドの人。

最も、これは個人的な感想だが。

春の訪れは苦難の後に

著者…瑞穂

2005年3月も半ばを過ぎたある日の早朝、東京都練馬区の住宅街は人々が始動するにはまだ早いので比較的静まり返っている。

その一角にあるマンションの一室、西沢家に綾崎ハヤテ君は何故かいた。

白皇学院の生徒でありこの春から2年生に進級する。同世代の男の子よりはやや背が低い、バイトと運動で培った、鋼の筋肉を持つ温和な天然ジゴロで、執事の正装が似合っている。

三千院家の執事たる彼がどうしてお屋敷にいないのかについては後述するが、現在ハヤテ君は西沢家で朝食を作っていた。

そうこうしているうちに、このお話の主人公である西沢歩さんが起きてきた。

都立潮見高校に通う長身の可愛い少女で、ハヤテ君とは元クラスメイト。特にこれといった特徴のない普通の高校生だが、人当たりはよく明るく前向きな性格の持ち主である。

「おはようハヤテ君、いつも朝からありがとう」

「おはようございます、西沢さん。いえいえ、こちらこそいつもお手伝いをしていただいてどうもありがとうでございます」

明るく元気な笑顔で挨拶する歩さんに対して、ハヤテ君も温かい笑顔で挨拶を交わしていた。

「もう、歩でいいって言っているのに」苦笑を浮かべる歩さん。

2人で朝食を作り、掃除や洗濯といった他の家事も済ませたところで、唐突に歩さんが口を開いた。

「ねえハヤテ君、ハヤテ君はこれまで多くのバイトをこなしてきたんだよね？」

「はい、そうですけど、どうしましたいきなり？」

「私もお金が欲しいからバイトしたいんだけど、何かいいバイトないかな？」

ハヤテ君が考えあぐねていると、ひとつの包みが目に止まった。

「西沢さん、あの包みってこの前僕が差し上げた、ホワイトデーのクッキーじゃないですか？」

言われて歩さんは顔を紅潮させると、クッキーの包みとハヤテ君を交互に見て俯いた。

「そ……そうだったね。あの時はどうもありがとう、ハヤテ君。」

あれから食べたけどとても美味しかったよ」

「いえいえ、どういたしまして。そういえばヒナギクさんの好意もありまして、ヒナギクさんのお宅でそのクッキーを作ったんですよ」

そう言ううちにハヤテ君に妙案が浮かんだ。

「だったら西沢さん、『どんぐり』でバイトしませんか？

喫茶店は接客業として健全なバイトの代表ですし、あそここのマスターとは顔見知りですから。それにヒナギクさんも働いていますし、僕もそこで働きたいんですよ」

ヒナギクさんの名前が出たので紹介すると、フルネームは桂ヒナギクさん。桃色の腰まである長髪が目を引き可愛い女の子である。1年生から白皇学院の生徒会長を務めており、歩さんやハヤテ君とは同級生。

容姿端麗、成績優秀、公明正大な学院のアイドルで、男女問わず人気が高い。ただし気は強くボーイツシユな一面も持っている。

ヒナギクさんの名前が出たので憂鬱そうな歩さんの表情が一気に晴れた。親友と想い人の2人と一緒に働けるのだから。バイト未経験の彼女にとってそのような環境で働くのは、大いにプラスになると言える。

「そうだね、それじゃあ一緒に働こうかな。よろしくねハヤテ君！」

両親とのやりとり、『どんぐり』においての採用及び自己紹介などは割愛。

銀杏商店街の一角にある喫茶『どんぐり』。自宅兼用なのか2階建てになっており、茶色い看板にどんぐりのような丸い文字が書かれている。商店街というわりに人通りはさほど多くないので、お客さんも少ない。

趣味で経営しているのか、店の内部はテーブル席だけでなくカウンター席も設けられている。流石に椅子は円くはないが。

別の日、バイト中に歩さんはハヤテ君、ヒナギクさんと3人で他愛もない話をしていた。

すると不意に、ハヤテ君が彼らしい話を切り出してきた。

「唐突で申し訳ありませんが、皆さんに感謝しなければいけませんね」

「いきなりどうしたの、ハヤテ君」
目を丸くするヒナギクさんにハヤテ君は続ける。

「僕はこれまでずっと、働いてばかりの人生を送ってきましたが、愛情を注がれたことは殆どありませんでした。ですが昨年のクリスマス・イヴに公園で孤独だったところを救われて以来、ナギお嬢さまやマリアさんには執事として雇っていただき、白皇学院にも通わせていただきました。

ヒナギクさんには時計塔に連れていってもらいましたし、この前のホワイトデー前日もヒナギクさんのお宅でクッキーを作らせてもらいましたよね。

西沢さんにも前の高校時代からいろいろと助けていただきましたし、バレンタインデーにチョコプレートをいただきましたから。本当にありがとうございます」

ハヤテ君の姿勢を低くした感謝と思いつ話に2人は顔を赤く染め、特に告白も絡んでいる歩さんは両手で頬を覆っていた。

「い、いいわよ別に。困っている人を助けるのは当然のことよ」

「こちらこそありがとうだよ、ハヤテ君。あの時ハヤテ君が助けてくれなかったら私はもうこの世にいないかもしれないんだよ。だから今度は私がハヤテ君を助けてあげなきゃ、それに今は私の家にいるんだから！」

ツンデレなヒナギクさんと素直な歩さんの性格がその

まま表れた台詞である。

「……ちよつと待って。歩がハヤテ君に助けてもらった経緯を教えてもらえない？ それにハヤテ君が歩の家にいるってどういうこと？」

思わず聞き咎めてツッコむヒナギクさん。歩さんは過失というより自爆で赤くなったが後の祭りだ。ハヤテ君も赤くなり俯いていたが、何を思ったのか安心した顔つきに変わっていった。

「ヒナギクさんならお話ししても大丈夫ですね。信用できますから」

それを聞いた歩さんも安心したのか、落ち着いた表情になった。

「そうだね。ヒナさんは口が堅いし、何より私たちの親友だから」

「じゃあお話ししますけど、かなり長くなりますので覚悟してくださいね。次の章をまるごと使いますから」

頬を染めるヒナギクさんに2人は詳細を明かしたのであった……

バレンタインデーも終わった2月20日の日曜日、三千

院家のお屋敷ではいつものように、執事のハヤテ君とメイドのマリアさんがナギお嬢さまのお世話をしていた。

ところがナギお嬢さまが入浴中にハプニングが起きた。

バスタオルを持ってきてほしい、と言伝を受けてハヤテ君がそれを持ってお風呂場へ向かうと、ちょうど彼女がお風呂から上がったところであった。

即ち、ハヤテ君はナギお嬢さまの裸体に遭遇してしまったのだ。これだけならまだしも、髪を拭いてほしいという彼女の要望にお応えすることになり、あまつさえキスマでされたのだ。

全て彼女からしたとはいえ、衝撃的な行動だ。年頃の少女が恥じらいを覚えない筈はない。これによりナギお嬢さまが落ち着くまで、ハヤテ君は主に今夜から3日間の休暇を与えられたのであった。

夕方の曇り空の下、湖や馬場、緑豊かな私有林まで持つ、練馬区の半分を占める三千院家を出て、今夜泊まる場所を探し始めたハヤテ君。

しかしハヤテ君にとっては珍しい休暇だが、休暇を貰ってもどこに泊まればいいのか分からない。まあ仕方がない、夜逃げやバイトに明け暮れて人付き合いがあまりできなかつた潮見高校時代以前はもちろん、白皇学院編

入直後ということもあってハヤテ君には友達が少なく、「頼れる」友達となるとほぼいないのだ。

そうしているうちにお金に関する数々のトラブルに見舞われて、自動販売機の飲み物さえ購入できない程ハヤテ君の持ち金が尽きてしまった。

夜も遅い負け犬公園は静かで、時々通りかかる車の交通量も少ない。自動販売機と電灯の光がほのかに彼を癒していたが、1時間前から降りだした雪には無力でしかなかった。ひとりうなだれていたときにこの雪、まさに弱り目に祟り目だ。

防寒具は身につけていたものの、降り注ぐ雪、貧困、寂しい人間関係という、身も心も冷え切った夜にハヤテ君を1本の傘が、女神が救った。

「こんなところで何をしているのかな、ハヤテ君……」
「西沢さん……」

「そんなところに座っていると風邪ひいちゃうよ。何があったのか知らないけど、うちに来るといいんじゃないかな」

こうして歩さんはハヤテ君を連れて、自宅のあるマンションへ向かうのであった。

約10分後、歩さんの自宅があるマンションに到着した。

近くの屋台はひっそりとしていたもののまだ多くの部屋で明かりは点いており、人の気配を感じさせていた。

歩さんの自宅に招かれて、挨拶とバレンタインデー前にお邪魔した際の非礼を彼女の家族に詫びたハヤテ君は、歩さんの勧めで入浴していた。

「僕はここで何をしているんだろう。ここは西沢さんの家なんだよな……」

この機会に西沢さんともっと仲良くなりたいけど、とにかくこの前のような迷惑だけは掛けないようにしなくちゃ」

そう決意したハヤテ君はそれから10分後にお風呂から上がり、歩さんの父から服を借りて着ていた。

「あ、お風呂上がったんだねハヤテ君。少しは温まったかな？」

「ええ、ありがとうございます」

心なしか顔がやや赤いハヤテ君。敏感な歩さんはハヤテ君の真意に気づいていたものの、気づかぬふりでその場を過ぎすと、一家揃って夕食にした。

夕食の席でハヤテ君から3日間お屋敷に帰れないと聞かされたので、歩さんはこのチャンスを逃さないように、

自宅への宿泊を提案したのだ。

ハヤテ君にとっては願ってもない提案だが、残りの家族である両親と弟の一樹君が顔を曇らせた。曰く、3日間泊める事に異論はないが、年頃の少女がいるのが気掛かりだと。

この懸念についても歩さん主導で払拭した。

(なお、原作でハヤテ君が暇を与えられた2月20日までの出来事について、このお話では歩さんは全てを知っているとして進めていきますのでご了承ください)

1年近く前の入学当初、他に車が走行していなかったカーブの多い坂道で、歩さんが下り坂を自転車で登校中、ブレーキの故障でカーブを曲がり切れず、危うくガードレールに激突して転落死するところだった。

しかし意外にも激突による衝撃や道路に叩きつけられるケガ、坂から投げ出される恐怖などは一切襲ってこなかった。ドラマのようだが、ガードレール激突寸前にハヤテ君が両手で身体を持ち上げて助けてくれたのだ。その後、間違ってもハヤテ君がそれをネタにゆすったり他人に明かしたりはしなかった。

ハヤテ君が三千院家の執事になって以来、お屋敷で主のナギちゃんをお世話して、料理・洗濯・掃除・裁縫と

いった家事全般、お使い等のお仕事も一生懸命にこなしている。それに鷲ノ宮邸の地下で展開された三千院家遺産騒動や三千院家でのバレンタインデーなどにおいて、ハヤテ君はごまかしたりせず自分の心中を吐露している。また潮見高校に入学して以来、普段からよく話しており一緒に遊園地へ遊びに行くなど、今でも親しく交流している事も付け加えた。

以上から、ハヤテ君は優しく素直で、誠実な少年なので信用できると。仲も良いから泊めても問題はないと歩さんが赤くなりながら断言した。

このエピソードを聞いた3人は少し赤くなりながら安心した。

あとはハヤテ君がどこで寝るのかという問題だが、一樹君の部屋と一緒に、若しくはリビングでと決まり、最大の難問も解決したのでハヤテ君を泊める障害はなくなつた。

こうして1日目は無事に過ぎていった……

2日目の早朝、ハヤテ君はいつものように起きていた。

泊めてもらっている身とはいえ、生活リズムは変わらない。着替えを済ませたハヤテ君はこれまたいつものように朝食を作っていた。そこへ平日ということで全員が早く起きてきて、登校や出勤の準備をしていた。因みにハヤテ君の服に関しては原作通り、制服、執事服ともに生徒会室に隠してある。

歩さんもハヤテ君も別の学校なので、1日中一緒にいられないのが最初は寂しかった。それでも学校が終わればバイトでも家でも会えるからと気持ちを切り替えて、2人は登校した。

そして放課後、2人はバイトを終えて帰路についていると、歩さんの表情が心なしか沈んでいるようにみえた。

「あの、西沢さん。いつもの元気がないですがどうかしましたか？」

「ハヤテ君……実は来週の学年末テストについてだけど、私全然自信がないの。どうしたらいいのかな……？」

「僕も自信ないですよ。お嬢さまやマリアさんに教えていただきなから勉強していますけど、赤点回避がやっつとで高得点を取るの難いでしょうね」

これは普通の少女からすれば羨ましい台詞だ。歩さんの周りには勉強ができる友人はいないが、ハヤテ君には

すぐ傍に居るのだ。しかも日常的に。

「だったら私も今度マリアさん達に教えてもらおうかな。けどこの3日間はハヤテ君と一緒にいたいから、勉強を手伝ってもらえないかな」

「いいですよ、こんな僕でよければ」

この台詞を聞いて歩さんは輝いた。それはそうだ、勉強を見てもらえるし、好きな人と一緒にいられるから。

「それじゃあ今夜と明日の夜、よろしくお願いねハヤテ君」

「はい、こちらこそよろしくお願いします。西沢さん」

帰宅して夕食、入浴を済ませて歩さんの部屋で2人きり。歩さんとハヤテ君はテーブルを挟んでテスト勉強をしていた。

やがて勉強も終わり、談笑していると、おもむろに歩さんが口を開いた。

「ねえハヤテ君、確認するけど明後日の朝までいるんだよね？」

一瞬、虚をつかれたハヤテ君が首肯すると、

「なら、今夜と明日の夜は私の部屋と一緒に寝てくれないかな？」

この言葉に青髪の少年は天を仰いだ。年頃の少年少女

が同じ部屋で、というより一緒に寝ると言うことはつまり、2人が一歩進んだ恋人関係になると同じであり、突き詰めて解釈すると、大人の階段を上ると言うことだ。

歩さんはハヤテ君と入学当初からの初恋を实らせたいので、このチャンスをものにしたい。一方ハヤテ君は初恋相手にフラれて以降、恋愛はしていない。彼の真面目な性格上、この提案を受け入れ難いのは歩さんもよく知っている。

ところが次の瞬間、ハヤテ君の口から思いもよらない台詞が飛び出した。

「じゃあ同じ部屋で寝ましょうか。僕の起床時間は5時と皆さんより早いので、僕が早く起きれば一緒に寝てもばれないでしょう。それに僕としても西沢さんと仲良くなりたいですから」

ハヤテ君の了承に歩さんも最初は驚いたが、提案を受け入れてくれたのを喜び、2人は歩さんの部屋で寝ることにした。

もちろん大人の階段を上るわけもなく、3日目も無事過ぎて4日目。ハヤテ君がお屋敷に帰る朝、彼は歩さんの家族に泊めてもらったお礼を述べていた。

「いやあ、この3日間泊めてもらえなければ危うく凍死

するところでしたよ。皆さんに大事にさせていただいて本
当にありがとうございます」

笑顔のハヤテ君に対して、家族全員も温かい笑顔で応
えていた。

「私たちが家事全般をしてもらって助かったわ、綾崎君。
今度メイドとしてうちに来ない？」

「僕が女の子になったらそれも悪くないですね。その時
はよろしくお願いします」

歩さんの母の冗談にハヤテ君も冗談で返していた。西
沢家とハヤテ君との距離が意外と縮まったようだ。

歩さんは想い人が離れていくのが悲しそうだったが、
バイトでまた会える、初恋を叶えるチャンスはまだまだ
あるとポジティブに考えていた。明るく前向きな彼女ら
しい。

そしてハヤテ君に何か呟くと、彼もまた赤い顔で応じ
ていた。

こうしてハヤテ君の外泊は終わったのであった。

三千院家のお屋敷に帰ってきたハヤテ君であったが、

すぐさまお屋敷を出ることになった。先刻のように一時
外泊ではなく、今度は追い立てられてしまったのだ。

どういふことかというところ、歩さんの家への宿泊は不問
であったが、ナギお嬢さまの気に障ったのは、歩さんと
ハヤテ君が仲良く一夜を過ごしたことであった。

「ハヤテが好き」なナギお嬢さまの恋心というより、「ハ
ヤテは私のもの」「私以外の女とくっつくなど許さない」
「何でも自分の思い通りになる」という思い込み、或い
は独占欲が結果としてハヤテ君を解雇してしまったのだ。
誤解と分かり、早とちりで悔やんでも悔やみきれない
過ちを犯してしまった、大事な人をまた1人失ってしま
った金髪ツインテールの少女は数日もの間泣きじゃくっ
た。同居しているメイドさんに慰められながら。

その後ハヤテ君は西沢家に居候として引き取られた。
もちろんナギお嬢さまから、もう2度と苦しめたりは
しない、また執事として私の傍にいてほしいから戻って
きてほしいと強く慰留された。ナギお嬢さまとしては、
誤解とはいえ告白されたので愛する人の傍にずっといた
い、ハヤテは誰にも渡さないというのが本音だ。

しかしハヤテ君曰く、もう今回のようなトラブルに巻
き込まれたくはない、自分に変わらない愛情を注いでく

れる、優しい人の傍にずっといたいという理由で慰留を拒否した。人生の大半を苦労やトラブルの連続で生きてきたハヤテ君にとってはもう懲り懲り、振り回されるのはもう御免であり普通の生活を送りたいというわけだ。

ハヤテ君の学費及び生活費、またおよそ1億5000万円の借金の残高については、ナギお嬢さまが解雇の大きな代償として今後全額を支払うことになった。

こうしてハヤテ君を縛っていた鎖がちぎれて解き放たれたのであった。

「……という経緯なんですよ」

2人が詳細を明らかにすると、予想通りヒナギクさんは赤くなっていた。

この時期にはハヤテ君とヒナギクさんの不仲も解消しているだけでなく、ヒナギクさんがハヤテ君に片想いしているの、ヒナギクさんにとっても初恋相手と一夜を過ごして、あまつさえ同居するのはこの上ない夢であり望みだ。

歩さんにとってもそれは同じであり、今後とも一緒にいたい、居候としてではなく恋人同士として付き合いた

いと願うことに変わりはないのだ。

閑話休題。2005年3月13日、ホワイトデー前日。西沢家にて。

バレンタインデーにチョコレートを貰った男性が相手の女性にお返しをする日を前に、ここにもお返しに悩む少年がいた。

「そういえば明日はホワイトデーだったな。先月泊めてもらった際にも『ホワイトデー、楽しみにしていてください』と言った手前、西沢さんに喜んでもらえるものを作らなきゃ」

そう言いつつ、実はまだクッキーを作っていなかったりするハヤテ君。

小麦粉（薄力粉）、砂糖、バター、卵などの材料はあるので、今回はここで作ってみよう。

そう決めかけたところで妙案が浮かんだ。

「そうだ、ヒナギクさんも女の子からたくさんチョコレートを買っていたから、ヒナギクさんのお宅と一緒に作るう」

そう決めたハヤテ君はヒナギクさんに連絡して、ことの経緯を話した上で、ヒナギクさんのお宅でクツキーを作らせてもらえないかお願いした。

その結果、了承を得る事ができたので、家族に連絡した上でヒナギクさんのお宅へ向かった。なお材料は家庭のものなので、道中で銀行とスーパーに寄って自腹で材料を調達することになった。

よく晴れたお昼過ぎ、ハヤテ君は財布と愛用のエプロンを持って自宅を出た。

3月中旬ということもあって、冬のような寒さはないが風はまだまだ冷たい。

午後2時を過ぎ、お金を下ろしてクツキーを作る材料の買い物を済ませたハヤテ君は、誰もがとは言わないが目を引く、比較的大きな洋風の家に着いた。2階建てで、離れみである。ヒナギクさんのお宅だ。

インターホンを押して、応対に出てきたヒナギクさんの義母と挨拶を交わしていた。以下ではヒナママと表記する。

実際の年齢は著者も知らないが、見た目はまだ30歳前

後。茶色いウエーブヘアが揺れる、目がパッチリとした面長のやや線の細い感じの美人である。

そこへヒナギクさんがやってきた。

「こんにちはハヤテ君、いいところに来てくれたわね。私もこれから作るころだったのよ。さあ、上がって」

家の中に通してもらうと、毎日掃除しているからなのか、家の中全体が清潔な、同様に床の木目も綺麗なお宅である。清潔感を堪能して2人は台所に直行した。

室内に入るとこれから作るクツキーの材料だけでなく、ご丁寧に計りやボウルなど調理器具まで全て揃っている。ハヤテ君も材料を用意した。

直後に2人は下準備として分量を量り予めオーブンを180℃に温めて、小麦粉と砂糖を別々にふるっていた。加えてハヤテ君は買ってきたバターをレンジで温めて溶かした。

なお今回、ハヤテ君はステンドグラスクツキーを、ヒナギクさんは薔薇(ばら)のクツキーをそれぞれ作っている。

なお、大雑把な作り方につきましてはお話の中で触れてまいりますし、webサイトにつきましても後述させていただきます。

〔ハヤテ君サイド〕

本来はバターを1時間くらい常温にしておくが、今回は時間もなく他人の家で作っているのので、レンジでバターを溶かすことにする。

レンジから取り出してクリーム状になるまで練り、砂糖を3回に分けて加え、混ぜていた。流石に昔から家事をこなしており、ケーキ屋のバイトも経験しているだけあって、作業に淀みがない。

同じように溶き卵を少しずつ加えて混ぜ、バニラエッセンス、下準備した適当な大きさのレッドチェリーやナッツを入れてから、小麦粉を加えてサククリと混ぜた。それをラップで包んで冷蔵庫にしまったのはいいが、生地を寝かせるだけで30分も何をしようかな。

〔ヒナギクさんサイド〕

こちらは薄力粉、片栗粉をふるう必要はないので、材料を混ぜて揉むだけでよい。生地を成形するまでは楽だ。バター或いはマーガリン、砂糖、バニラエッセンスを

同じビニール袋に入れてよく揉み、同様の工程を卵、続いて2種類の粉でも同じ袋で行った。その後食用色素をほんの少しの水で溶かして同じ袋に加え、色の調節をした。

こちらも冷蔵庫に寝かせる段階まできたので、生地がまとまるまで何をしようかしら？

お互いの生地を寝かせている間、オーブンの予熱も成形・型抜き準備も終わりやることがない2人。そんな時に思い浮かんだのはバレンタインデーの思い出話であった。

「ハヤテ君は歩にあげたのよね。ナギやマリアさんからほもらわなかったの？」

「いえ、西沢さん以外の方からはいただいておりません。お嬢さまはお料理ができませんし、作れなかったようです。逆に、僕に作ってプレゼントしてほしいと要望する始末。」

マリアさんは誰かに作っていたみたいですが、最初に作ったものは何故か壊してしまいましたし、その次には自分の、鳳凰をかたどった豪華なチョコレートを作ってい

ました」

この言葉にヒナギクさんは呆れるほかなかった。同じお屋敷にいたので、せめて義理チョコは貰えるはず。それに自分用の豪華なチョコレートとは一体何？ そんなものを作って楽しいのか、と。

「……………そういうヒナギクさんは誰かにあげたんですか？」

暫く沈黙が空間を支配していたが、やがて気を取り直したハヤテ君が勇気を出して問い合わせると、

「ハヤテ君、あなた本当にデリカシーがないわね。そういうことを女の子に聞くものじゃないわよ！」

叫びながら白桜を召還する生徒会長さん。男の子にあげたのではなく女の子から貰った、などとは言えるわけもない。

「ああああ、ごめんなさい、ごめんなさいヒナギクさん！もう聞きませんからどうか許してください！」

何気なくいつもの調子で質問するハヤテ君であったが、自らの過ちに気づいて謝った。

それを心からの謝罪と受け止めたヒナギクさんは、小さな溜息をひとつつきながら矛を収めた。

「まあいいわ。だけでもうこのような発言はしないでね。今度言ったら許さないわよ」

「はい、すみません」

ハヤテ君は嘆息をつきながら頭を下げたのであった。

それから30分後、2つのクッキー生地がまとまったので、型抜きをして、ヒナギクさんは併せて薔薇の成形パージュンも作っていた。

「わあく花の形綺麗ですね。お菓子作りも上手ですね」褒められて赤くなっているヒナギクさん。褒められて嬉しくない人がいるだろうか。いや、いない。

隣には10日前、16歳を迎えた自分の誕生日以来好きになった人がいるので尚更だ。

「そんなことないわよ。それを言うならハヤテ君もハートや星の形が上手くできているじゃない」

「どうもありがとうございます。まあ焼きあがった時の仕上がりを楽しみます」

「それもそうね」

この時ハヤテ君は一般論を言ったに過ぎないが、ヒナギクさんにはハヤテ君が軽口をたたいたように聞こえた。即ちヒナギクさんの負けず嫌いに火がつき、「お返しする人に対して真心を込める」という人情が薄れている。

最終工程として、180℃に予熱しておいたオーブンでクッキーを焼くところまできた。

両方とも2度焼きだ。ステンドグラスクッキーは、砕いた飴玉を入れる前に7分、入れた後に5分の計12分。同様に薔薇のクッキーは焦げ色を防ぐためにアルミホイルをかぶせる前に10分、かぶせた後で10分の計20分焼く。

※ここで紹介したクッキーの作り方についてURLを掲載させていただきます。

文章はさほど変わらないとはいえ、詳細な手順と写真が掲載されていますので参考になるかと思えます。

webサイトのトップページ：
<http://cookpad.com/>

ステンドグラスクッキー：
<http://cookpad.com/recipe/3744703>

薔薇のクッキー：
<http://cookpad.com/recipe/3744567>

焼きあがったクッキーをオーブンから取り出したところ、綺麗な見た目であった。焼く前に照り出し用の卵黄をクッキーに塗ったためか。

「できましたね」

「そうね、まあこんなところかしら」

クッキーを冷ましてからプレゼント用の包みに入れる前に試食することにした。

「折角なのでヒナギクさんのクッキーを1枚いただけませんか？ それに僕の作ったものを食べていただけると幸いです」

「いいわよ。ならば私からも」

笑顔で交換しあう中、もうひとつの声が重なった。

「あらまあ、いい匂いがするわね。もうクッキーができあがったの？ ねえ、もしよければ私にも貰えないかしら？」

「お、お義母さん!!」

「ヒナギクさんのお義母さん」

驚きの声を上げる2人に対してヒナママはいたって気楽、天然だ。しかし拒否する理由はなく、プレゼントする前に第三者に食べてもらうのもいいと考えていたので、

ヒナママの好きにさせた。

「どれどれ、まずはヒナちゃんの作った方から……」

薔薇の形も色も綺麗ね。見た目はすごくいいわ。それじゃあ食べてみようかしら。

(もぐもぐ) んー、美味しいし硬すぎず軟らかすぎずと
いったところだけど、なんて言えばいいのかしら。何か
が足りないような気がするわ」

見た目と味はよかったのに食感に欠点があると言われる、
それまで浮かべていたヒナギクさんの笑みは崩れて激しく動揺した。

(材料を入れ忘れた? いやいや、予めテーブルの上に
全て用意したからそれはないわね。

それじゃあ混ぜ方が足りないとか? いや、それもない。
もしそうなら、特に砂糖を入れた直後の混ぜ方が足り
なければザラザラした食感が残るはずよ。

残ったのは形成と焼きだけど、お義母さんの台詞から
してきちんとできたからそれも有り得ないし……一体何
なのよ!?)

「ヒナちゃんすごく悩んでいるみたいね。具体的には私
にも分からないけど」

ヒナママは決して弄んでいるわけではないが、その表情
は笑っている。一方ヒナギクさんの方は平常心だけで

なく冷静さをも失っている。

「どれどれ、今度はハヤテ君の作った方をもらおうかし
ら……(もぐもぐ)」

うん、美味しいわね。ほどよい硬さで歯ごたえがあつ
て、美しいハート型や星形なのもいいわね。ヒナちゃん
のとは違う感じが、まごころというか温かみがあるわね。
『料理は愛情』っていうし」

この台詞にヒナギクさんは我に返った。思い当たる節
がある。

生地がまとまる間ハヤテ君とバレンタインデーの話を
していたけど、その時に口論になった。その怒りが収ま
ったとはいえ、成形する際には真心が籠っていない気が
するし、その直後、勝負じやないのにムキになった。

だからヒナギクさんは思い直した。雑念は捨てて、食
べてもらう人のためにプレゼントを作ろう。そして私だ
けではなく、贈る側にも満足してもらえようなプレゼ
ントにしよう。

台所に入ってから3時間30分後、クッキーを作り直し
たヒナギクさんとそれをお手伝いしたハヤテ君は完成し

たクッキーを幾つかの包みに入れ、明日の準備を整えた。

ハヤテ君は準備を終えた直後、ヒナギクさんとヒナママに、台所を借りクッキーを試食してもらったお礼を伝えていた。

「ヒナギクさん、ヒナギクさんのお義母さん。おかげさまでクッキーを作る事ができました。感謝しています。どうもありがとうございます。ご協力がなければ今日中には作れませんでしたよ」

「それはよかったわね。それじゃあ私のことはいいから、明日のホワイトデーにはきちんとその相手にクッキーを届けてあげなさい」

安堵の笑みを浮かべるハヤテ君に対してヒナギクさんも温かい笑みを浮かべていたが、次の瞬間、彼女の頬が染まった。

「その前にヒナギクさん、ヒナギクさんのお義母さん。これを受け取ってください」

ハヤテ君が差し出したのは、たった今まで作ったクッキーのうちの2袋であった。

「ヒナギクさんにはバレンタインデーのチョコレートをいただいたわけではありませんが、ヒナギクさんには本当にいつもお世話になっていきますから。お義母さんにも台所を貸していただきましたので、そのお礼です。受け

取ってください。僕の感謝の気持ちです」

「いえ、どういたしまして。また困ったときには言っ
ね、いつでもどうぞ」

そう言いながら、ヒナママは笑顔で受け取った。

「あはは……あれだけしてもらって、お礼はクッキー
つだけで済ませようって気なんだ？」

ちよつと意地悪な笑みを向けるヒナギクさんであった
が、ハヤテ君のうろたえる表情を見て「勝った」と思っ
たのか、すぐさま普段の笑顔に戻り、

「ふふつ、冗談よ、冗談。ありがたく受け取ってあげる
わ。」

じゃあ来年のバレンタインには、私の手作りチョコレ
ートをあげるわ」

「よ……よかった……来年は楽しみにさせていただきます
すね。」

それでは、僕はこれで失礼させていただきます」

「待って、ハヤテ君！」

頭を下げてその場を去ろうとするハヤテ君の背中に、

川から流れる水をせき止めるような声が聞こえた。

振り向いたハヤテ君の視線の先には、何かを必死に伝
えたいという思いのヒナギクさんがいた。

「どうしましたヒナギクさん？」

ハヤテ君を呼び止めたものの、発言内容に重みがあるからか、俯いて顔を赤くするヒナギクさんの口から言葉は出てこない。更に言うと、隣にヒナママがいるからなのか、恥ずかしくて伝えられない。

「あの……あのね、

月が……綺麗ですね」

「はい？」

とうとう言えたと内心喜んで顔を赤らめるヒナギクさんに、呆気に取られるハヤテ君、言葉の意味を、娘の言いたいことを理解して背景をピンク色にするヒナママ。三者三様の反応である。

ここで「月が綺麗ですね」の意味するものが分からない人のために解説すると、旧千円札の画像であった夏目漱石（なつめ そうせき）が、「I LOVE YOU」を日本人独特の奥ゆかしさを込めてそう訳した言葉である。つまり「好きです」と遠回しに言っているのだ。

知的な彼女らしい。

とはいえ、突然そう言われても理解できるわけもなく、ましてや相手があまりにも鈍感なので伝わらない。「好きです」と素直に伝えなければ彼には通じないだろう。

ハヤテ君から何の反応も返ってこないのも、返事を待っているヒナギクさんは別の感情で赤くなり始めていた。「あの、さっきの言葉ですけどどういう意味ですか？」

思わずハヤテ君の質問にキレるヒナギクさん。

「もう！ この言葉の意味が分からないの!? 『ハヤテ君のことが好きです』って言いたいのは私は！」

肩を息をつくヒナギクさんを、ヒナママがくすくすと笑いながらなだめている。

ハヤテ君は暫く悩んでいたようだが、やがて意思を固めたようだ。

「分かりました。それではまだ知り合って間もないので今は彼氏としてではなくお友達として、それから恋人同士としてお付き合いさせていただきます。そういうことでよろしいでしょうか」

傍から見ると半分は成功だ。ところがヒナギクさんにとっては不満らしい。

「そんなの嫌！ すぐにでも彼氏になってほしいの、お願いハヤテ君！」

また負けず嫌いが発動したようだ。

これまで男の子との付き合いに興味を示さなかったとはいえ、学院のアイドルに告白されるだけで幸せである。だがタイミングが悪いことに、ハヤテ君の言うように2

人が知り合つてそれほど経つておらず、お互いに相手についてまだ知らない事が多いのでハヤテ君は首を縦に振れない。

「そう言われましても、何事にも正しい順序というものがありませんよ。まだお友達になつて日も浅いですから、まずは仲を深めていきましょう。」

恋人同士の間になるのはそれからでも遅くないでしょう」

ハヤテ君の筋が通つた言葉にヒナギクさんは口ごもつた。

確かにそうだ。ハヤテ君とヒナギクさんが出会つたのは今年新学期が始まつて間もなくだから、まだ2か月しか経つていない。チャー坊を助けた時が初対面だから。

それにヒナギクさんがハヤテ君を好きだと気づいたのは3月3日のヒナ祭り祭りなので、あれからたった10日。

その間、お友達らしいことは何ひとつしていない。突然恋人同士になるのはいくらなんでも無理がある。

付け加えると、まだどちらもそれほど愛情を注いでいないので、ハヤテ君の対応は致し方ないといえる。

ヒナギクさんにとっては学校でも2人きりになれるチャンスはそうそう巡つてこないのです、ヒナママが立ち会つてるとはいえ、この告白をものにした。

果たしてヒナギクさんの結論は……？

「やっぱり恋人から始めたいわ！ お願いハヤテ君、ずっと私の傍にいて！」

感情が爆発したかのようにハヤテ君に迫つた。

ハヤテ君は溜息をつきながら残念そうに、

「すみませんがお受けできません。」

確かにヒナギクさんは成績や人間性についても評判がいいです。けど僕はそれよりも、

優しさはもちろん必須ですが気持ち安らぐ、愛情を注いでくれる人と一緒にいたいのです。わがままな人は好みではありません。それでは失礼いたします」

そう言い残してハヤテ君は桂家を後にした。

後に残されたのはヒナママと、落胆した少女であった。

ハヤテ君が桂家を去つてから、彼に告白を断られたヒナギクさんをヒナママが諭していた。

「ヒナちゃん、傍で聞いていたけどあれはハヤテ君の言い分が正しいわよ。」

新学期になつて初めて出会つたのなら、1つずつステ

ッブを踏むべきだと思おうわ」

この言葉にヒナギクさんはやりきれない思いと絶好のチャンス逃した後悔で胸がいっぱいになった。

「ハヤテ君……私はあなたの事を諦めないわ！」

3月14日、ホワイトデー当日。

授業が終わり午後4時30分過ぎから潮見高校の校門前で、歩さんがハヤテ君の到着を今か今かと待ちわびていた。ハヤテ君との約束を信じて、ここで待ち合わせていた。

約束について用件は聞かされておらず、ただハヤテ君から「歩さんをお願いします。今日の夕方5時に潮見高校に行ってもよろしいでしょうか。大事なお話がありますから！」

という文面のメールをお昼休みに、4時間程も前に受け取っただけだ。

敏感な彼女も「OK！じゃあ夕方5時に校門で待っているよ！」と返信したところを見ると、何かあるのかは想像ついているようだ。

下校する生徒たちが時々、1人で校門にいる歩さんを

見ていたが、歩さんはそんなことを気にしていなかった。ハヤテ君の事しか眼中にない歩さんにとって、彼女の現在の心境は「早く来てほしい」という期待する一方で、「本当に来てくれるかな」という不安になる方が大きかった。

それから約10分後、約束通り包みを持った少年がダッシュで向かってきた。

「西沢さん！ 待たせてしまいましたか？」

約束通り来てくれたので、ハヤテ君を信じて待っていた甲斐があった。それに想い人に会えたので、息をついた少年に向かう少女の表情は晴れ晴れとしていた。

「ハヤテ君……」

「あの……バレンタインのお返しはいらないと言っていましたけど、チョコレートを貰えて嬉しかったですから、これを受け取ってください」

そう言いながら懐から取り出したのは、昨日ヒナギクさんのお宅で歩さんへの愛情を込めて作ったクッキー。

それを差し出され、受け取った歩さんの顔はお返しを貰えた嬉しさと想い人からのプレゼント自体に対する喜びに満ちあふれていた。

受け取ってもらえたということでハヤテ君も満面の笑みを浮かべていたが、心なしかまだ緊張しているようだ。

「それからもうひとつ、お返しをしたいのですがよろしいでしょうか」

「そう言われた歩さんは眉を顰めた。他に何かあるのかなと。」

「歩さん、1か月も遅れてしまいましたがお返事をさせていただきます。」

先日外泊させていただいた時もそうでしたが、歩さんは優しく一緒にいて安らぐ存在です。

僕はそんな歩さんが好きです！　こんな僕ですが、お付き合いしていただけませんか!？」

突然の告白に、歩さんはこの上なく、林檎のように真っ赤になった。無理もない。先月のバレンタインデーの際にハヤテ君に想いを伝えたお返しが、告白なのだ。

先にも述べたように、歩さんは入学当初、ハヤテ君に命を救ってもらって以来、ずっと彼を想い続け、好意をアピールしていた。遊園地にデートに誘うだけではなく、バレンタインデーにもチョコレートを渡し、今回の件とは別に告白までしているの、ハヤテ君に注いでいる愛情は並大抵のものではない。これほどまでに長い期間、純粹に同じ人を想い続ける彼女は素晴らしく、立派だ。これがハヤテ君の心を動かした最大の要因と言える。

もちろん歩さんの返事は……

「ありがとうハヤテ君。ハヤテ君がそう言ってくれるのをずっと待っていたんだ……うっうっ……私も漸く報われたよ……」

私こそ、これからもよろしくねハヤテ君。今後は恋人同士として。これからは私のこと『歩』って呼んでほしいよ」

届いた想いに歩さんは思わず嬉し涙を流しながら、漸く誕生した恋人に抱きついた。するとハヤテ君も、新たに誕生した彼女を優しく抱き寄せて頭を撫でていた。そのまま2人はお互いに唇と唇を交わした。なんとも微笑ましい。

東京に白い雪が舞い始めた日、文字通りホワイトデーのことであった。

f i n .

著者あとがき & メッセージ

【充電池さん】

三度目の西沢賞に輝いてしまいました充電池です。

せつかくの西沢賞なので、また西沢さんメインで凝ったのを書こうと思っていたのですが、色々忙しくてそれどころじゃなくなっちゃいました。この『ひとつ飛ばして』は、自分が学生の頃にノリと勢いだけで書いた小説のリメイク（ほんの少し）です。モノローグを極力少なくしているので小説とも言えないような感じですが、二人の夫婦づりが書けたので気に入っています。

終盤では、（原作では絶対にありえないことだろうけど）二人は実は幼少期に出会っていてなんかやかんや色々あった！的な妄想をしてくだされば幸いです。

それでは股。

【ロッキー・ラックーンさん】

にゃんぱすー、RRです。今回も合同本の発刊おめでとうございました。クイズ大会では、なんとかなんとか成績を残す事が出来て一安心。温めていたネタを放出する事が叶いました。

さて、作品について。アニメ「ハロー！きんいろモザイク」11話のifストーリーとでもいましょうか、本来は綾と陽子が家に泊まりに来てシノを慰めるという話だったのを、出会うキャラクターをアリスちゃんとヒナに変えてみたという物です。「人間になったアルマゲドン」という感じで金髪に迫ってくるシノには、流石のアリスちゃんもタジタジなのではないかと思えます。きっとイギリスの方のアリスちゃんがこんな状況を知ったらまたヤキモチを焼いて

しまうんだろうなあと、書いていて妄想が膨らみました。

最後に、今年中に小説板の更新を一回でも出来たらなあとはいっているのですがなかなか実現しない今日この頃…。あと半年もあるし、なんとかなるやろ（慢心）

それでは、また参加出来るのを楽しみにしております。読んで頂いた皆様、ありがとうございます。おにゃんぱす。

【サタンさん】

初めましての方は初めまして、サタンと申します。

主に止まり木のチャットルームで活動している者です。

今回は機会がありまして、過去作品を掲載させていただきました。

今回の掲載作品は私のSSの原点である、ハヤテ×泉が主題になっています。

やりたかったことについては、ハヤテのことをまだ意識していないころのいいんちよさんの可愛さを表現したかったのですが、

文章から伝わっていますでしょうか。

私事ですが、この合同本に泉SSを掲載の決め手になったのは、同時掲載しているSSのとある執筆者様の存在が心を動かしました。

お名前は明かしません、その方の泉SSがきっかけで自分がSS書きになったと言っても過言ではありません。伝わらないかもしれませんが、この場を借りて御礼を申し上げます。ありがとうございます！

そしてこれをご覧になっている読者の皆さん、そして合同本作成とクイズ大会を企画して下さいました双剣士さんに感謝

いたします。

止まり木という交流の場が未永く長く続くようにと祈って、後書きを締めさせていただきます。

【RIDEさん】

どうも、RIDEです。

今回は初芝ヒスイと法仙夜空を取り扱った話を書きました。

ただ、本格的に出てきてまだ日も浅いので私の想像が多いに含んでいます。この話が現在執筆中の長編の外伝として位置付けとしているのはその要因があります。この小説に登場しているダイやらエイジとやらも、その長編のキャラです。

本来なら一週間前には書き上がっていた予定が、数ページ加筆に加え緊急出勤と体調不良が重なり、結局いつものように締め切り近く。

改善しようと思ってもなかなか変えられないものです。

初芝ヒスイの名を聞いた時はこの話に出てきたとおり豆柴と間違えそうになってしまいました。そのため、初登場の過激シーンもどこか可愛く見えてしまったことも…。

法仙夜空に至っては、不細工な犬を連れた女の人というイメージしかありませんでした。可愛らしいシーンもありますけど、登場時期がとぎれとぎれだったので、本当に名前を忘れてしまうことも…。

お二人にはこれから、待たせた分の活躍を期待しています。
RIDEでした。

【瑞穂さん】

こんにちは、或いは初めまして、瑞穂です。

第9回合同小説本刊行おめでとうございます。

前回に続いて執筆権を譲っていたのでの投稿になりましたが、譲っていただいたからには皆さんが読みやすいSを書こうという気持ちで執筆させていただきました。

しかし書き始めたクイズ大会翌日から2週間で、手直しを含めて構想と執筆が終わったというのに、推敲だけでそれだけの時間を取られるというのは地獄でした（書き上げたのは締め切りの1週間前）。

早いところ取り掛かって正解だったなと今でも思います。

いつものようにカップリングという著者が最も好きなジャンルを選択しましたが、今回は単行本8巻でハヤテ君が一時的に外泊するお話と、同12巻のホワイトデーの原作IFといたしまして、歩さんを主人公にハヤテ君とヒナギクさんを絡ませてみました。大好きなキャラクターなのでぜひ書いてみたいなど。

しかし読み返すとハヤテ君がメインになっているような気がしますが、このあたりはまだ私の修業不足ですね。人物描写や情景描写なども含めて。

3月後半の書き出しからどうして遡ってばかりで未来に進まないのか、につきましてはホワイトデーをエンディングと決めていたためですので悪しからずご了承ください。

しかしバレンタインデーに女性が男性に愛の告白をするというのはよく聞きますが、ホワイトデーに男性から女性に告白するという話はあったのか不安もありました。ですがお返しをする日なので別にいいですよ、男性が女性に愛を伝える日があっても（笑）

あと、最初の構想としてはハヤテ君を居候ではなく西沢家の養子に迎え入れる予定でしたが、話が噛み合わないの
で断念しました（笑）

それでは最後に、執筆権を譲っていただいたトビヨロさん、企画および編集、拙作を掲載していただいた双剣士さん、そして合同小説本を読んでもいただいた止まり木の皆さん、どうもありがとうございました。

【ピーすけさん、双剣士】

(あとがき辞退)

編集後記

9冊目のクイズ合同本をお届けします。今回はクイズ参加者の減少により敗者復活枠が2つから1つに減ったにも関わらず、前回の7名合同本よりページ数が多いという力作揃いとなりました。表紙と裏表紙を担当してくださったピーすけさん、2年半のブランクを超えてこられたサタンさんに加え、確かな成長を見せる瑞穂さん、得意のギャグタッチが冴える充電池さん、独自路線のRIDEさん、そしてお約束のアリスちゃんネタ炸裂のロッキー・ラックーンさんによる共演を存分にお楽しみくださいませ。

いつもならここで「2016年の止まり木もイベント盛り沢山ですよ！」と宣言するところですが、今年はちよつと趣向を変えていこうかと思っています。ワンタイム人狼の失敗、テーマ茶会初の流会、そしてWebラジオが希望者なく無期限休止……5月は勢いの陰る兆しがはつきり現れた月でした。かといってイベントを減らせば、ご多忙な中で都合をつけてきてくれる方の数はますます減る一方でしょう。数を増やすのではなく質を高める、あるいは「複数日の開催期間のどこかで参加できればOK」な類の企画を今年の夏は重点化していこうかなと考えています。たとえば絵描きさんと字書きさんの協同企画のようなものを……。

そう、今年のテーマは「週刊・単発企画」ではなく「お祭り騒ぎ」です。カーニヴァルだヨ！

奥付

書名…ひなゆめファンの止まり木・合同小説本 Vol.09

発行責任者…双剣士 (<http://soukenshi.net/mail/>)

発行日…2016年6月12日



第9回 ひなゆめファンの止まり木合同本

作者

- サタン
- RIDE
- RR
- 充電池
- 瑞穂

(敬称略)

